

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.351

麻生路郎



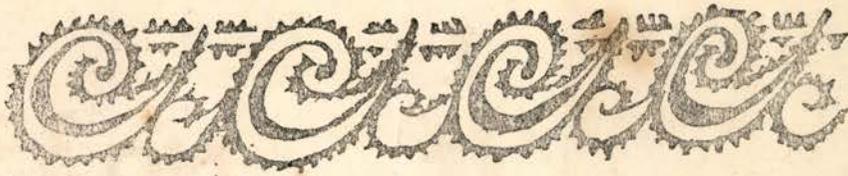
昭和廿二年七月一日發行
第三種郵便物認可
（每月一回一日發行）

創刊大正十三年・通卷三百五十一号

高堅むじな

八月號

川
柳
の
旌
証



八月号目次

題字……………麻生路郎	窓口談義……………麻生路郎(三)	川柳家の二十四時	楳元 紋太・田中 辰二(二)	中島とし代さん	丸尾 潮花(三)	を訪ねて……………	旅に拾う……………	新川柳鑑賞……………	坂田博士急逝を悼む……………	良坊句抄……………	源 莖 朝……………	雑吟は身刃……………	聯隊旗手の軍刀……………	久良侍先生傳……………	婦人友の会便り……………	不朽洞句帖……………	川 柳 塔……………	同 舟 近 詠……………	近 作 柳 櫛……………	一路葉「青空」……………	金 泥 集……………	各地 柳 壇……………	川柳第二教室	不朽洞会から……………	柳界展望……………	後 記……………
			麻生 霞乃……………			薬山快夢起(五)	麻生 路郎(二)	石川侃流洞(五)		富士野鞍馬(四)	北川 泰集(六)	東野 大八(三)	前田 雀郎(四)			麻生 路郎(三)	麻生路郎選(六)	諸 家(五)	麻生路郎選(六)	西村梨里選(六)	新川博也選(八)	麻生霞乃選(五)	戸田古方(四)	(三)	(三)	(三)

本 社 八 月 涼 線 句 會

・涼しい会場 楽しい句会。
 日 時 八月七日(火)午後六時
 場 所 光明寺
 大阪市天王寺町下寺町三丁目市バス停
 前(市電下寺町又は日本橋三丁目下車)
 会 題 「精進料理」(会)麻生路郎選
 「別 居」(会)川村好郎選
 「顕 微 鏡」(会)黒川紫香選
 「打 水」(会)佐野白水選
 席 題 三 題(当日発表)
 柳 話 麻 生 路 郎
 句 評 清 水 白 柳 子
 呈 賞 ☆各題天位
 会 費 ☆路郎選天位に不朽洞賞
 五十円
 幹 事 紫香・淡舟・賀峯・いさむ
 塚子・白水・東洋男・愛論
 雄声・一三天
 川柳雑誌社句會部

全五十巻 新書 養教 學生
 日本圖書館協会選定図書

麻生路郎著
川柳とは何か
 一川柳の作り方
 と味い方

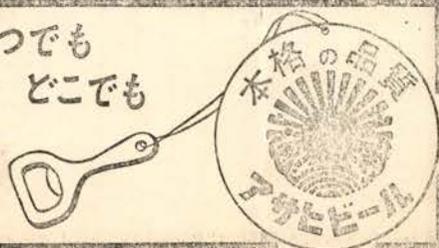
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。その川柳
 がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動
 くか、及びその作り方と味い方を柳壇の第一人者が五
 十余年間の実作者としての尊い経験を生かして最も平
 易にわかり易く説かれた斯道最適の案内書。

取 次 川 柳 雜 誌 社

至 文 堂

東京都新宿区払方町

いつでも
 どこでも



路郎主幹の自白録
 川 柳 手 拭

頒 画 七〇円
 送 料 一 枚 八 円
 御 注 文 は サ ー ビ ス 部 へ



窓 口 談 義

○ 太陽の季節と云う映画を観た時に思ったことであるが、彼等の生活には経済的な裏づけがないと云うことであつた。明くつばなしで、やりつばなしで、子どもを孕んでも、まるでよそごとのように聞くし、自分の行動に一切責任を持たない。女にしても、乗り廻している目家用車も父のものだし、遊び廻っている費用も、みな父のふところから出てい

る。しかし、行動そのものを見てみるといつか自分も仲間入りしていろいろな思いがしてまことに愉快であるが、いつまで続くものでもないことを、すぐに感じなければならぬ。管だが、それを感じようとしてもしないで瞬間的に生きているのである。私たちの若い頃に、浪六の小説が流行つた。この作中の人物が、浮世三ぶん五りんて暮らす人たちが何して食っているのか判ら

ぬ人間ばかりだつた。そこが反つて世間にくけたらしい。絶えず経済的に苦しめられていると、経済を無視した行動に生きている人たちの羨望の的にしたがり、読んでいる間だけでも、自分もその一味に加つていような錯覚をおこして快感を感じていたものらしい。勿論浪六と浪六では時代のへだたりが大きく過ぎるし、思想の点から云つてもまるで違つた。浪六の論議は、その出来栄が、経済的な裏づけのない人物の生き／＼した活躍ぶりに、一種の魅力を感じ

させる点に一脈通じるものがあるとは云えないだらうか。

○ お互は特殊の職業に従事してはいない限り、空気の存在を忘れて暮らしていることの方が多し。そんなことばかり考へていてはやりきれないことも事実だが、時々思い出して見ることは必要である。それが同じように、自分が一人だけで生きていけるものでないこと、他人の恩恵の大きいことなども時々考へて見る必要がある。

私たちが、疎開していた時に、豆腐が喰べたいと思つても、数里先の村へ、豆と薪を運ばなければ喰べられなかつた。それすら自転車ですれ等を運んでくれる人や、それを作つてくれる人たちの恩恵に浴したものであつた。自分で豆を作り、薪を掻きあつめ、豆腐を製造する道具をつくり、それから豆腐をつくつていては全くやりきれないであらう。金さえあればそんなこと

をしなくてもいいではないかと云う人があるかも知れないが、その金を認めてくれるのも相手がいけないことには互譲と何等変りはない。金を持つていながら栄養失調で死んで行つた実例を見せられたのも、そう遠い話ではない筈である。

お互は社会生活、共同生活と云うことについてモット／＼深く考へて見る必要がある。

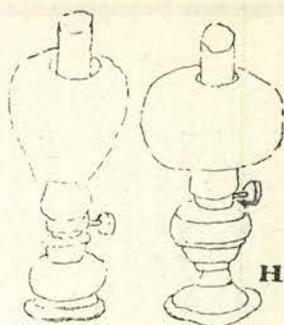
不朽洞句帖

麻生路郎

織田作の話で更ける水都祭
 思い出の橋ばかりなり水都祭
 水都祭まだこいさんが居そうなり
 パーマする留守にビールをあてがわれ
 梅雨明けに庭のサンパツ思いたち
 一合の晩酌老子誦む社長
 妻らしく茄子のいろを自慢にし
 あきらめて嫁たを無口と思ひ込み
 潮の香の新居で今日は何の会
 ここを斯うしたらと新居築しけれ

生々庵医博士の新居を祝して

カッパ写真 主幹・路郎
 四月、篠山で撮影



下 (一)

久良伎先生傳 補遺

前田雀郎

当時のそういう久良伎先生の、というところは短歌一辺倒にあったそれをよく裏書するものは、佐々木信綱博士の旧臘「東京新聞」文化欄に寄せられた。「落合、与謝野、正岡君の追憶」という一文である。これは短歌革新運動に於ける三先達に就ての思い出を記されたものであるが、しばしば「また久良伎先生にも触れて、先生がそれらの人々の間にあつて重要な役どころを演じたことを明らかにされてい

即ち佐々木博士は、その落合直文の項に於て先ず先生に触れ「自分らが出しておつた心の花は、編集方針として常に自由な立場をとり、寄稿家の原稿は出来るだけ掲げておつた。当時日本新聞の社員の坂井久良岐君が寄稿の随筆は、思い切つたことを書きま

くつたもので、中にも与謝野君についてひどく書いてあつた」ことから鉄幹の師である直文の心証を損ね、この誹謗の文はもはや看過し得がたいとして、東北の旅先きから「余は可成我慢して諸君と提携致し和歌の革新に従事せむと思ひしかども忍ぶこと能はず。頑迷なる強敵四方に猖獗をきはめをる今日、われわれ革新派にて仲間われするには好ましからぬ、今はいかにせむ。婦京の上整々堂々弁難攻撃に従事せぬと存居候」というような激越な抗議の手紙が直文から心の花社へ叩きつけられ、その諒解を得るのに博士が一方ならず心を痛めたことが記され、次いで正岡子規の項にも「前に話した坂井久良岐君が日本新聞社員であつたのでよく来訪されたが、あの日のごとく、同じ社の正岡子規君が歌を詠もうと思つてい

た好忠の會丹集と諸平の柿園詠草とを貸したに、数日後返しに來られたから、さらに曙の志濃布遇舎歌集を貸すと「曙の志濃布遇舎歌集を貸すのでゐた」との坂井君の詞であつた。次に正岡君の作百首を持つて來て「この中から十首をぬいてほしい。百中十首として日本新聞に掲げたいから」とのこと。その求めに応じてすぐれた作十首を抄出して返したにやがて新聞に出た」と先生のことを記されている。

子規の「百中十首」は、前記「歌よみに与ふる書」につゞき日本新聞に發表されたもので、同じく久良伎先生も「師長を以て居らず」に於てこの事に触れ「先生乃ち其先輩の迷夢を破り、併せて世上の歌者を警醒せんと欲し「歌人に与ふるの書」十篇を掲げ、遂に革新派の歌百首を作る。ために眠らざること三昼夜、中村不折之を聞き、其

病勢をして重からしめんことを恐れ、諫争僅かに止むことを得たり。然れども先生これより歌吟を發せず。一日余等をして其新作に就て各十首を選ばしむ。名付けて「百中十首」と云ふ。尙余をして旧派の大家に就て批評を乞はしむ。余即ち其草を懐にし、日々諸家を叩く。皆異端邪説を以てこれに遇す。嘲罵百出も得る所なし。僅かに佐々木信綱の同情を博したるのみ。これより余氏と先生との間に在りて其意見を傳達す。佐々木氏の「志濃布遇舎歌集」を寄せしに基き、先生の橋際覽の歌論を草せしが如き其一なりとす」云々と記している。

佐々木博士は「百中十首」の試みに先立って、久良伎先生を介して子規に「志濃布遇舎歌集」を貸し与へたことになつてゐるが、久良伎先生によつてこれは逆にそれに遅れることゝなつてゐる。「百中十首」に就ては今手許に子規の歌集を持たないので、その日本新聞への掲載の月日をこゝに明らかにし得ぬのを遺憾とするが、子規の「一人々に答ふ」という歌話の中に「三月十一日紙上に番外百中十首（松の山人投）」として掲げある歌を吾等が変名にて掲げ候やの御尋ね有之候へども右は尽く柿園詠草中に在る詠

にて吾等の歌とは全く異り居候」とあるのを見ると、「歌よみに与ふる書」の第十回目を終つた三月六日からこの十一日の間にそれは紙上に發表されたものゝ如く思われる。これに對し「曙の歌」という歌論の同紙に掲載されたのは三十二年の三月から四月へかけてであり、約一年を遅れることゝなるので、この点久良伎先生の記憶に於て正しいものあるようであるが、前掲「人々に答ふ」の中に「右は尽く柿園詠草中に在る歌にて」と子規が既に柿園詠草を説いてゐることを明らかにしてゐるところから推すと、「百中十首」に先立って好忠の會丹集や諸平のその集を子規に貸し与へたという佐々木博士のそれもまた誤りなきも

ヒゲソリ後に

アストリンゼンは世界的常識!

- 1 生々した男性美をつくる
- 2 爽快でヒゲソリがたのしい
- 3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力!

明色アストリンゼン

桃谷順天館

のとしなければならぬ。そこでかれこれ接するのに子規は短歌に心動くや早くも久良枝先生を介し、佐々木博士より種々の歌集を借覽しており、問題の曙覽の「志濃布迺舎歌集」のみは「百中十首」におくれて借りたというのが實際に近いのではないかと想像されて来る。(ついでに、前回に引用の久良枝先生の文章には、この佐々木博士を始め、大町柱月、与謝野鉄幹等の新詩会の発会は上野公園三宜亭に於て行われたようになって居るが、佐々木博士の右の子規に就ての思い出によると、それは明治三十年の三月のことで「不忍の弁天の橋を渡った左側、文人墨客のよく集った長跽亭」となっており、こゝで始めて子規と逢ったことになっている。そして文章のつゞきからそれは「百中十首」の後のことのように受取れて来るが、三十年の三月ではその発表された三十一年の三月からは一年遡ることになり、何か腑に落ちぬものがある。前記の一件にせよ、この食い違いにせよ、あるいは子規・久良枝・信綱三先生の交渉をたゞすというだけのことで、別に川柳家としての久良枝先生の育ちを考へる上に差支えある問題ではないが、私どもの記憶というもの、この両先生のそれに今更

らのように教えられるのである。当時久良枝先生の子規に対する、この如くその態度はまったく忠実なる弟子としてあつた。そこに先生の自らの歌人としての成長を願う志のいかに熾烈であつたかを窺うに充分なるものがあるが、前記佐々木博士の思い出の中に見える「鉄幹事件」というのも、またそういう先生の、子規への弟子としての忠勤の一つの現れであつた。先生の「心の花」への寄稿は何年何月のことか、これも今の私には不明であるが、先生の「師長を以て居らず」の中に、次の如き一節がある。「後ち先生鉄幹と大いに歌論を試みんとし檄を鉄幹に寄す。偶々余が「大帝國」所掲「歌学放言」鉄幹の怒を招く」と。おそらく「心の花」のそれもこれに関連して行われたものではないかと思われる。即ち子規と鉄幹との論争に当り、いわば助鉄砲として、この「大帝國」ほか「心の花」等へも、鉄幹攻撃の文を寄せたというようなことであつたらう。その援護射撃の筆弾がたまたま落ちて落合直文に中つたものと見たし。

この事件はしかし、久良枝先生にとつてもまた大きな心の痛手となつたかのようである。というのは世間はこの事に関し、独り先生のみ糾弾の矢面に置かれ、これに對し当の子規の何等なきなかつたことを非難したらしく、「師長を以て居らず」には、前の文章につゞけて「而して先生毫も知る所なし。只だ余の他人の言を直写するに係る。即ち對を以て鉄幹に答ふ。或人曰く、久良枝の子規に於ける尽したりと云ふべし。今子規子が態度甚だ冷酷なるを覺ゆと。余これを聞いて曰く、これ全く吾が子規先生の心事を知らざる者なり。先生の眼一に詩学研究にあり、誠意を以て直言す。其是を是として其非を非とす、明鏡止水豈一塵の汚影を有することを許さんや。故に虚偽を惡むべきこと甚し、是を以て門下の士常に各自の意を吐して先生と論ず。毫も阿諛面従の醜態なし。是れ当世稀に見る所の美風に非ずや。其冷々たるが如るに足らんとあつて、先生は累の子規に及ばんことをおそれ、そういう子規のため私を放下して陳弁これ努めた様子が記されている。「しかも彼は往く」当時の先生の子規に對する、というよりも、或いは短歌に對する、傾倒ぶりには正にこの言葉の如くで、そこに川柳への関心など仮にも思ふを許されぬものが見られる。

戦後布哇からの日本觀光は一種の流行のようになつて、年々日本を訪れる同胞が多つて、そのほのほの内地の何処へ行つても布哇のお客がよく持てるし、又あちらの人が一目見ると布哇からの觀光だとすぐに分るらしい。所が吾々としては、布哇客と知れてよい場合とよくない場合がある。親迎御馳走と好意を寄せて貰う時は、此方から名乗つても出たい位だが、布哇からだなど足許を見られ、法外な宿賃をとられたり、高い品物を売りつけられたりするのは真平御免である。之からの經驗談は以上の何れとも關係のない、只だ私達夫妻が外国から来たお客だと見られた、至つて罪のない話。——阪神芦屋に泊つた或る朝のこと、二人である川べりを散歩して居ると、七八ツ位の可愛い少女二人、学校へ行く途中から此方へ歩いて来たが、私達を見ると洋装は洋装でも何処か変つて居るし——そこは女の子だから眼が鋭い——殊に僕の方は布哇ヤケのした内地人とは異つた顔色なので、その一人が「異つたアメリカさんやな」と連れの友達に語りかけたので、「アメリカさんじゃないのよ日本人よ」と云つた処が、アメリカさんと思つたのが、イトも流暢な？日本語

旅に拾う (その三)

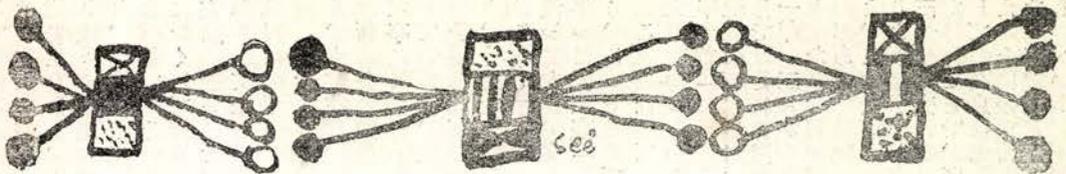
築山快夢起

で逆襲して来たので、驚いたような顔で赤らめると二人手に手をとつてバタ／＼と学校の方へ駆けて行つてしまつた。

帰人
お次は京都で、清水寺へ行く途中から拾つたタキシートの運ちゃんが見た私達の視察で、郵便局前で降りハワイ行のメールを投函して戻ると

「旦那方は、何処か外国から来られたのでしょ」
と運転手君に凶星をさされたので、どうして分ると聞くと、
「お二人の話を聞いて居りますとLの発音がハッキリして居られます」と云う。Lの発音がハッキリして居ると云われて聊かすぐぐたく感じたのは妻の方は兎に角、僕のLは可成り注意しても兎角、僕のLが発音され、子供して兎角注意されるのだが、こうして運転手君から(この人は感心に英語を勉強中であるとも云われた)折紙を一つで貰つて見ると、在留四十一年間、練磨の功宜しからずとも申さうか(實際はLとRの中音位に聞えるのであろう)幾分垢けのしたLが発音されるようになつたのかと思ふと、ひそかに得意にならぬに汲には行かなかつた。

せ
要するに布哇唄りのエトラン



川柳塔

大阪市 中島生々庵

肩書が多うて葬儀屋顔なじみ

転宅第一夜その静もりが旅館めき

転宅第一夜こんなドアに突き当り

豊中市 戸田古方

内側から見れば秀才らしくなく

バスも来ぬところで光っていた螢

本心を出しそびれたで助かった

悪びれぬ相合傘とすれちがい

大阪市 市場没食子

人格も儲け第一主義に落ち

食う心配ない刑務所へ廻れ右

握手より出ない女を連れて旅

禿げてゝもコソ／＼エロのコレクシヨソ

芦屋市 寺井鏡々

いやですとハッキリ紅茶飲み干して

春シヨールの値段も知らず飯を焚く

ひとり街を行けばアベック多いこと

甥の新婚を祝うて

今日もコロツケ明日もコロツケでも楽し

ホノルル市 内藤草一郎

未亡人その心境をみな言わず

持て余しましたとヒスの話なり

ハイボールでは味のない思い差し

何時の間か似合わないわのイヤリング

東京都 宮田不二

お下劣な一コマもあり人生よ

お興入れの車も止まる交叉点

銀行の事務は清楚な笑顔持ち

米子市 三鴨美笑

置きりにされて煙草が減るばかり

さかろうて見ても先方金があり

生ビール女の連れを遠慮する

音楽会父には縁がなさすぎる

幹事長酒の心配まで務め

大阪市 正本水客

たまさかに来たは選挙のことかいな

扇風器客にめいわくとも知らず

病人のそばでうどんをよばれてき

急逝の朝まで呑んでうらやまれ

大阪からの電話しきりと湯の宿に

宮城道雄氏急逝

大阪市 丸尾潮花

世にのこす曲か虚空に何か書き

逢う恋もあろうに世間はばかって

娘のことをみんなに頼むほど弱り

どの顔も嫁してしたがう娘に見えず

気の抜けたビールで酔える男にて

腐らせて捨てる生活を羨まれ

大阪市 北川春巢

角帽と歩いて母も楽しそう

サンガラスはずし特二の人となり

夫婦喧嘩で買ったテレビとは云わず

縁談へ日ソの如し君と我れ

奈良県 尾崎方正

席談るどころか赤子ねかしとき

インテリの何する人ぞ爪が延び

スカートのフック掛らず辞めると云う

執着な棺に入るまで株を買い

婆さんになってカールのトップパーの

大阪市 武部香林

投票日腐れ卵を買うに似て

新社員まだ冗談が判りかね

パンを得る手段詩人は詩人らし

気弱な娘学費でさえも云いそびれ

独り居て壁は淋しいものと知り

力ある線なめくじでさえも描き

宮殿の如く地下鉄影も無く

大阪市 木下幽王

寝しすまってから小声で堪忍してヤ

ワハハ、の声を病人にらめつけ

ギターがありや／＼止らぬ病み上り

目覚時計が甲斐性なし／＼と刻む

大阪市 福田妄夢

生ビールやめてクリームさげて去に

夜は美し黒い金魚に似た人と

親捨てた二人蚤の多い部屋を借り

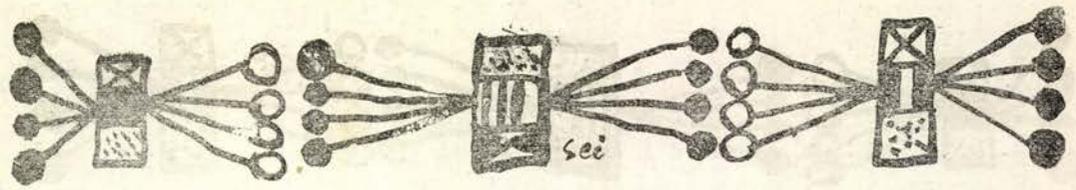
貯めているそうなど笑い合って呑み

年頃の会話汗を拭きながら

ラオシカエがまだやってくる京の町

出雲市 尼緑之助

大阪市 水谷竹荘



二号とはいわれたくない茶の師匠

ユーモア倶楽部

舞扇ふるえているもユーモア

五人男捕手の方が強く見え

広島市 国弘 半休

人並に忙しい振りして市場を出

原爆の塔はビルから見下され

タイル張りたつた二人の湯が溢れ

奥さまに好かれて助役左遷され

違反の荷たつた三分の理でかつぎ

兵庫県 小沢 史葉

気やすうに死ぬませんと人間文化財

ボリーナスを半分つけに取られたり

いかるがの里夕焼の美しい

女子寮の送別ビールもつけてあり

兵庫県 小西 無鬼

一二分は隙を残しな課長さん

衝突をすれば死ぬ気の船で飲み

琴平団参

ハネムーンの憶い出故郷の香りする

高松上陸

階段は高血圧にしんど過ぎ

琴平参宮

ナイロンを被むつた後楽園の雨

後楽園 尾崎市 小林 文月

改札口土産の端がひっかかり

席あるに子供は運転台に立ち

父の日じゃさあ羊かんじゃさあお茶だ

いさかいは子が風邪引いただけのこと

自分だけ真面目にやって阿呆くさく

扇風機置ける身分にやっとなり

大阪市 富岡 淡舟

小鳥チチチチと主人起したり

奈良県 飯降 白香

どぶくさい道頓堀で彼をもち

暗い道男の息があらくなり

山口県 長野 井蛙

仲人はどちにきいてもごもつとも

あのどろが好きかと野暮なことを訊き

空罐ガラ／＼寄宿の派手な音

財産はこれです赤ん坊抱き上げる

寸分の隙なく金はないけれど

大阪府 松江 梅里

金策の旅行を派手に見送られ

割箸で名指しをされる平社員

色づいたリンゴ絵になり唄になり

岡山県 直原 七面山

花輪贈って出馬かと聞かれ

嫁ぐ娘の挨拶へ父声が出ず

大観を見て

生々流転その根気さにかぶと脱ぎ

御馳走を残して来たに乗り遅れ

異議なしと片付けといて酒にする

けち／＼と言うて親父二号持ち

気まかせにされて病人淋しがり

ガタンゴトンと水爆の世に水車

ロケットの消え止む如く肺で逝き

美しい山を汚して首を吊り

女から淋しい道へ誘われる

パラソルを放して娘抱擁し

部分品取替えますと整形科

極楽の様に電灯もない故郷

汚職費もこめて予算は成立し

大阪市 西森 花村

ノースモーキング今居る処は何処の国

鳥取市 河村 日満

俺の名がないからすねてすねて言う

飲まさねばならぬコッソなど教えられ

曰々客があり国政の話まで

岡山県 福島 鉄児

長女阪大にて心臓手術を受く

アルバムの整理も終えて手術待つ

どうせ一べん死ぬのやさかいと娘はけな気

さて手術に決めりや反対意見も出

手術する金策に疲れ切り

手術室血を売る人が順を待ち

血を売りに来たのに札を云われたり

手術してともかく息はして戻り

輸血輸血金で続いている命

娘の顔へ覗く涙が又も落ち

大阪府 足立 春雄

夕夙に隣のラジオ大きすぎ

病んで見て妻ありがたいものと知り

ギブスの足硬い足音響かせて

寄らば大樹の蔭とやら安んじて

大阪市 西 いわを

エハガキで知ってるだけの赴任先

石垣の間から出て花をつけ

仲良しにしてねと母が連れて来る

尾崎市 長谷川 三司

久し振り京は雨なり雨もよし

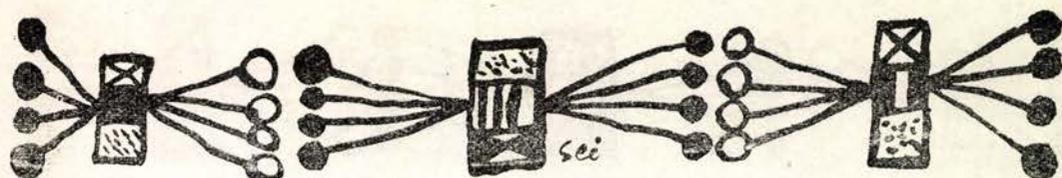
ワンタンに二級二本は淋しけれ

兵庫県 若林 草右

沿線をふり向きませぬ特急車

ナイターの灯をむだと見る明治

チンドンが汗拭いているビルの陰



牛歩からバツタにかえる選挙戦
自家用車社長好みの花も生け

高知市 大西 迷窓

利廻りの勘定楽しい年になり

恋人に少し逆らうことも知り

下関市 石川 侃流洞

自殺する気ならとそっけない三者

百合活ける看護婦さんが母に見え

撰炭婦一家を支えて手があれる

広島県 山田 季賛

停年で止めて弁当も子に譲り

エンコしたバスの車窓へ蟬が鳴く

大阪市 山本 葉光

繰り返えず歴史あるのにこりもせず

ナイトーに朝寝の出来る人ばかり

料理講習浮気封じの遠大さ

親類を無いものにして母子住み

倉敷市 木村 千容

火遊びもせずに結婚したを悔い

古稀というへなお重役がくつついて

石川県 那谷 光郎

素人療法訊いて訊かれて控室

参観日我子期待の手を挙げず

飲けるんでしようと末席妓に酌がれ

屋台店親爺親爺と親しまれ

子が飽いた頃には金魚疲れ切り

もう時計欲しがる程の子に育ち

石川県 野村 味平

鐘一つ貰うのに早退の娘が出かけ

火種をやるかとも言わぬおかみさん

黒い子がまだ入学の当もなく

温泉にいること番号知りもせず

地球儀の日本の位置は動かさる

老嬢は条件つきなら嫁く気らし
国会のバツヂ侮蔑の眼で見られ

大阪市 木村 水堂

一と儲けするとは云わぬ立候補

アルコール切れると養子らしくなり

貸している弱味あるのでまたも貸し

堺市 八木 摩天郎

当落の線すれ／＼はよう喋り

ガールフレンドとなら勉強をする子供

電線にとまるつばめもうらやまし

片恋でよかった刑期十余年

倉敷市 水谷 谷水

ストマニアどここの会社で落着く気

過去を聞くなんて貴方も平凡ね

婦人乗りいゝな振袖なびかせて

倉敷市 梶原 一善

顔立てる見合は恋人へも話し

通信簿この子もやはり蛙の子

弟のせいにしてている嫁きおくれ

岡山県 田村 藤波

足元は見えず遠くの花が見え

停年へズボンの色揚げして励み

岡山県 岡田 夜潮

鬼瓦栄枯盛衰物語り

一生涯ようも頭を打ち通し

割箸を割らせて囲碁がまだ続き

空腹を知らせるズボンのすり加減

大阪市 稲葉 鳩花

父ちゃんのあくびを猿が真似してる

パドロール恋の二人をさけてゆき

あの顔は冷たいなどと嫉妬めき

あの頃はあの頃はとてすねて見る

もうちょいと色気がほしい妻の酌

茨木市 下山 清潮
逆らえど若いお医者注射好き
日毎和を説けばアブレはそっぽ向き

しをからい鮭にも大臣うるちよろし

アドバルンそこらはすこしは涼しかる

岡山県 本田 恵二朗

せつがちがゆう／＼せまらぬ妻を持ち

鷺羽山平家の眠りそつと抱き

簡単に云うがと社長一時間

反省は三日続いただけのこと

大阪市 真鍋 一瓢

改札は憎くたらしいのばかり立ち

びつこ遺逸

阿呆くさやびつこに見られとない努力

参議員選挙

どっちもどっち棄権もけつたいくそ悪く

京都市 松川 杜的

言い負けて蚊帳の低さにふと気付き

二階借部屋半分蚊帳を吊り

大阪市 後藤 梅志

商売が閑かこの頃くどくなり

済みませんと一べん云わせたい小言

生れたての泣声をよしと思えり

女にはおしい気骨を叱り過ぎ

倉敷市 松村 万古

強盗の被害夫婦の年が知れ

気に入らぬ青二才だが社長の子

薄物を叱り師走の金を貸し

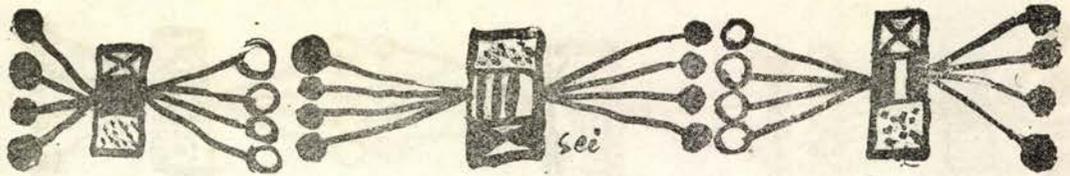
病院の理容師医者と間違われ

五十でも青二才なり議員席

裸から築いたような事を言い

訪問の教師外交と間違われ

住込みの身で強盗の夢ばかり



倉敷市 藤井春日

鬼瓦鯉の尻っぽにはたかれる

小鳥まで呉れて仕舞うた倦怠期

仙人のような姿の骨董屋

趣味よりも見栄で籍置く薔薇の会

岡山市 津田麦太楼

涙かめば応接室がカントと鳴り

白髪でも少しあつたらなと思ひ

末っ子は母のおいどへ来て甘え

古都の初夏鹿の糞にも青味あり

二口目には内の家内のことを言ひ

豆飯をよばれ郷愁ふつと湧き

末席は鮎のフライの腹が切れ

凡人の知恵は哀れな下剋上

マニキュアの指に緑のマスカット

米子市 小西雄々

後家とおすつもり化粧もひかえがち

仏像も拜み聖書も読んでいる

ミス募るプランも入れた観光課

大阪市 橋本峰春

今日も亦繩のれんの一人の宴

吹田市 橋本幸男

ベニシリンときいても背筋寒うなり

借金の断り愚妻に行かしとき

堺市 高崎雄声

食うだけにかくも忙しきスクーター

矢印を行けば讚美歌聞えて来

板チョコが一番好きな豆スター

大阪市 吾郷玲人

秒針のように稼いで死んで行き

青春に悔を残さぬ飲みっぷり

西宮市 若本多久志

草月流ほんとの花が見たくなり

蛙ガアガア恋人を求めとり

ミスニッポンもうその日から不倅

末っ子が五つになった二重顎

恐妻家今日は割木を割っていた

フアッションショウ銀座を歩く気で歩き

Y談へ医博はひけを取らぬなり

駅長の敬礼少し時代めき

倉敷市 野田素身郎

嘘をまた苦しい嘘でいゝのがれ

あれでもうわかりそうにまだ愛し

水虫へ残業のペンはかどらず

長雨へニコヨン笑うこと忘れ

大阪市 神谷凡九郎

呑めぬのに酒場のピラも握らされ

誰がやってもなんて思っている選挙

面白うくらさにもや損と云うネオン

盲愛の今日はすっかり慌てゝい

大阪市 山川阿茶

義理義理の中へ飛び込むほどに惚れ

支那そば屋都会の朝を寝にかえり

都心なりやこそ朝風呂湯があふれ

大阪市 清水望峰

出戻りが姓名判断ならいだし

クイズに出てからの妻の鼻意気

金廻りよくて無沙汰がつづいて居

奥さんの好みで女中着せられる

ながびくと思てか見舞おちついて

死にゆくからオッパイはすしとき

フンパツのタクシーに子供泣き出した

夫婦喧嘩身におぼえありほっておき

保険屋の根気へ猫ものびをする

大阪府 川端鬼醉

酔う程に梯子のくせがまだ脱けず

膝枕とつくに酔は醒めて居り

上っても下っても良し京の街

大阪市 木村十悟

保釈金やっぱり地獄の沙汰も金

土砂降りへ御いたましいハイヒール

宵寝には惜しいとネオンの街歩く

昨日今日十代希望変りどし

猫も腹減ってるらし妻の留守

おビールにしまほと妓気前よし

大阪市 伊達堰子

曲芸師ハラ／＼させる皿が増え

金費う時だけゼンマイ掛けたよう

ピンボケのほうを仲人持って去に

ちびた下駄履いて大きな事を云い

授業料頼りにしてまっせお父ちゃん

馬の脚八頭身にやらせたり

見合いの日すでに男は敷かれ気味

カンラカンラと昔は笑うたそな

日めくりは旦那の来る日折っておき

キス位いもうしてもよいほど通い

兵庫県 酒井ひか平

奥の院一つは意地で拜んで来

老杉の樹齢も聞いて見る社務所

青葉よし練歯磨も快ろよし

ハーモニカ我が青春を思い出し

処生術石では石の雨蛙

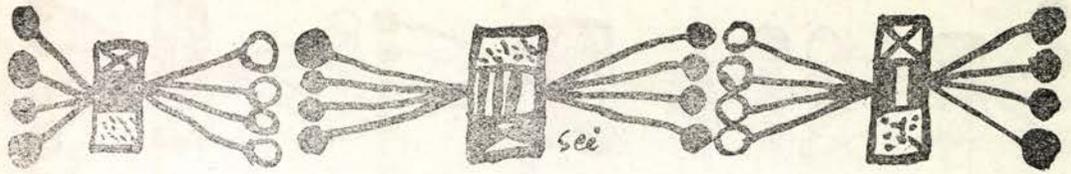
鶏メめる役とは養子気がふさぎ

うば車句帖を入れて押し出して

ガガ／＼とあひるは妻をいたわれり

山からの土産は百合をどきと呉れ

倉敷市 佐藤千代春



庭の花見ずに転動近うなり
宿題が手に付かぬらし蟬の声
今日も雨逝きし良人の写真を見

宇部市 津秋 六花

養鶏へ元隊長のひげがあり

長男盲腸入院

子の看病夢中の妻にほっとかれ

神戸市 野村 初甫

茄子が十円胡瓜が五円と世帯じみ

病弱の子には小犬がよくなつき

大阪市 金井 文秋

古ぼけた箱なつかしい琴の爪

腹が立ちますかと猥談まだ続け

備けてもスト遅配でもストをやり

お遊戯が男の子には馬鹿らしく

シャッターを頼みますわとアベックが

お隣りの葬儀に櫛並べられ

岡山県 戸田 喜楽

逢曳きを夜の女に冷やかされ

香煙をゆさぶる様な忍び泣き

唐津市 新岡 回天子

求人のもれも俺には向かぬ職

石一つガイドの説明長い事

飲むことも月給の内庶務課長

五十年アルバムあれもこれも欠け

岡山県 池田 古心

妬く妻が出世の椅子の邪魔になり

恋心なのか仕事の手がにぶり

香気さと言うのが取り柄土に生き

東京都 石居 高志

悪戯を鏡の母に見つけられ

三味線も習ひ二号の腰を据え

阿呆らしや奴も恋愛至上主義

昼間でも御用承ります飛田

約百名下呂から日本ラインを下る
アベックで来れば幾らと宿に聞き
混浴で娘滴のまゝ上り
こんな流れがあったのかと朝起きて

岡山県 坂手 有子

下宿訪う母は徹夜の荷を作り

さあ〜とビールの泡をすゝめられ

岡山市 土井 雷山

猿又にされて必死の野球拳

火と燃ゆる恋はカンナの色に勝ち

夏蜜柑子なき夫婦に萎び果て

民謡と景色あまりに違い過ぎ

ポーナスのその日一べん酔うただけ

松江市 勝谷 山川兎

ネクタイの柄まで汝ぼけている

うちの娘も勤めりやこんなあほだるか

大阪府 早川 清生

子沢山早口という子に育ち

弟子しこむことのきびしき力士老い

弁護士の朝貸し借りの話なり

三面へ色魔のようになって載り

四十すぎもうエロ雑誌しか読めず

大阪市 武部 若菜

自衛隊見学三句

筋金はどこかえやった自衛隊

主任さん口調の陸尉説明し

アメリカの武器のんびりと陽に当り

廊下行けば陳情団と見られたり

兵古帯で今日のおとこの上機嫌

夜店の灯赤いほうづき何処へ行た

小松市 伊藤 茶仏

お話の相手は齢が違すぎ

その戸を閉めてお呉れと妻は病み

燃え移るように新教とかに凝り

誰れの眼も同じ夫を捨てて逃げ
堺市 辻 圭水
秀才の娘も書きつぶすラブレター
ぬけぬけとのろけを書いた本を買
よくもまあ食べたな会社払う分

善通寺市 松岡 委滄浪

火を借りてバット喫うてるナと思

お茶でもと云う月並の誘いの手

石川県 中松 恒雄

電話口任せておけぬ口を出し

合唱へ音痴も少し声を出し

写真機へ女上手に笑うなり

紅一点と言えおばさん嬉しがり

保険屋のいい宣伝になる頓死

税務署に見に来て欲しい閑散さ

嫁欲しや寝押し筋が二本つき

村平とお巡りさんも碁を囲み

高知市 有友 玲羊

奥様のリードがうまいのか吞ます

ベッドのスプリングも動かしてみる見舞客

高知県 建沼 康之介

病院の規則へ恋人不服なり

気前よく買った娘さくらかと思

滋賀県 中島 可十

誤解からいっそ友情深くなり

恋秘める様に青葉の奥灯り

木魚でも叩けと雨が降り続き

停電へ二階はことりとともさせず

壁があり痴話も喧嘩も出来るなり

家賃だけ儲かる時計一つ売れ

大阪市 児島 与呂志

商魂は改築しながら営業し

他家の子のアイスキャンデー気にかゝり

妻の声せぬ我が家の味気なく



新川柳鑑賞

麻生路郎

〔二九五〕
女房の記憶に亭主恐れ入り
(不水)

あの時は斯うだった。この時は斯うだったと、女房と云うものは、別に覚えていなくてもいいものを事も細かに覚えていくものである。殊に、つれなくされてうらめしかつたことにいたっては幾年経っても忘れ得ないものである。買うてやると云って、買うてやらなかったこともハッキリと覚えていくもの、まことに怖るべき記憶力と云えるだろう。少しく甲斐性のない亭主なら恐れ入ってばかりいなければなるまい。この句はこの間の消息を巧みにつかんでいる。

〔二九六〕
近づけば山羊はゆつくり道

をあげ (水客)

田園風景のスケッチである。実感でなければ、こんなにも、静かな、ゆとりのある句は生まれるものではない。作者の詩情の豊さがおもわれる。

〔二九七〕
信心をせよと手ぶらの見舞が来 (幽王)

病気で長く床についていると、それにつけ込むと云う訳でもあるまいが、いろんな新興宗教の手が伸びるものである。近ごろは何ヶ月の間に癒してやるから信心をせよと云う新興宗教もある。そして癒らぬ時には信心が足らぬとか、前の宗教に関するものが家の中に残っているからそれを全部焼払わねば癒らぬと、家探しをしたりする宗教もあると聞いている。この作者

も、そうした新興宗教になやまされた一人かも知れない。それを手ぶらの見舞と軽く揮舞したものであろう。

〔二九八〕
獨り居の僧で雨戸も忘れ勝ち (古方)

どうせ盗られるものもないという安心感も手伝ってのことであろう。僧の独り居の静かさを、「雨戸も忘れ勝ち」という表現で想起させた手際のがよさがこの句のいのちである。

〔二九九〕
若いのに負けずこつちも妻を携り (没食子)

近ごろは何処へ出かけても、若い男女が、それは夫婦であろうと、愛人同志であろうと、お互いにシヤターを切っているほゝえましい情景に接するものである。この句は既に人生の半ばを過ぎた夫婦が旅に出ての一トコマで、「こつちも妻を携り」と若やいだ気分を出したと云うのである。面白いネライである。

〔三〇〇〕
車庫のためだけの車庫前停留所 (不二)

車庫のあるところ、あまり人家は密集していない。車庫の事務所以外には全然用のないところである。それでも、車庫で働く人たちだけが乗るための車庫前という停留所がある。一寸ゼイタクな感じがしないでもないので面白い。

〔三〇一〕
骨董屋推古のものにしてしま (文庫)

骨董屋稼業の心理を巧みにとらえている。そう、推古時代のものが、そこらに転がっている筈もないのに、この彫刻の具合が、どこやらの何に、そっくりだし、この古びから云っても、推古朝のものに間違いないです。コレは全く掘り出しものですよと、勝手にきめてかかるのを諷したのである。皮肉な句。

〔三〇二〕
新聞が補筆したよな遺族の辞 (法泉子)

「主人も満足でしょう」とか、「この子どもたちを立派に育ててゆくの、これからのわたしのことめです」とか、何とか、かとか、未亡人の言葉が型の如く報道されている。悲しい出来事の中でも常に遺族として、寸分の隙もない言葉が綴られているので、たぶん記者の補筆したものであろうとにらんだのである。補筆どころか、記者の作文の場合も多いのである。

川柳友人の会

一周年記念川柳大会
日時 八月二十六日(日) 午後一時
場所 光明寺
大阪市天王寺区下寺町二丁目
市バス停前(市電下寺町又は日本橋三丁目下車)

- 兼題「趣 味」 武部若菜選
- 兼題「祝 電」 高橋操子選
- 兼題「ヒステリー」 太田良子選
- 兼題「のみ取り粉」 麻生路郎先生選
- 兼題「爪 弾き」 麻生路郎先生選 (各題三句)

締切 当日二題発表
八月十五日 出、欠にかかわらず送句のこと当日は受付くださいませ。句箋(縦七寸横一寸二分)

句会後各地区友の会有志芸能大会
会費 食事付 二百円
投句並に出席者は女流作家に限る、当日会場にて友の会入会申込受付をします。

投句先
大阪市生野区中川町二ノ三〇
丸尾 潮花 宛

川柳家の二十四時

諸大家の真夜中の夢から、晩酌の饅子の影や食卓の皿の中まで覗かせて頂いた。諸先生の生活断片史として後世これが貴重な文獻となるかも知れない。 — 編集局

(3)

西宮市 相元紋太

★一時——まだ寝るには惜しい、もう少し用をしたい。
★二時——三時 明日のことを思うと寝ずにも居れずと、やむを得ず寝ます。
★四時——五時 夜中めつたに目があいたことはない。いつも平均六時間しか寝ないので、無理ではないかと思うが、くせになっている。
★六時——一度目があくが、もう少し。
★七時——十一時 起きにくいが始まります。起きれずに自分で起きます。私の洗顔は簡単、洗面器だけで済みます。食事は一切妻任せ。何を食っているか覚えないうち、但し食事前に冷水をコップに一杯、自分で汲んで、立ちのままぐつと呑む。これは年中です。呑まぬと咽喉が要求しますから忘れたことなし。

のが出来たら、外で食べるからかも知れぬ。
★十四時——十六時 家に居る日は、食事と食事の間は、通信の整理や選句と云ったことで追わ



むので食べものに注文なし。出されたものを食べる癖になっている。但し、うまいとか、味ないとかの挨拶はなるべくすることにしている。酒は飲む必要なし。外出が多いので食べたいも

の時分から仕度をして出かけるこの会へ行くにも国鉄利用で最短一時間を要する。
★十八時——十九時 外出から戻って食うことが多い。だから一カ月のうち二十五回位は十時頃になる。外で食べた日でも、たとえ一椀でも家の食事をする。
★二十時——二十一時 娯楽も的一切、記憶に残るほど観望したことなし、これではひからびはせぬかと思うが、その時間が惜しい。ラジオも家の者に任して

いるから、うわのそらで聞くだけ。
★二十二時——二十四時 夜十時頃から少しまとまって用が出来、それも選句や整理ばかり、新刊物も読んだことなし。結局六時開寝で、十八時開川柳に關した仕事をして、外のことがその間に狭まると云った状態です何をしてても楽しいですが、引受けた責任のあるものを抱えながら、他に手をとられてはいる間の焦燥感で、自然対者に無愛想になる時があります。

熊本市 田中辰二

★一時——四時 選句又は読書中招かざる客にも逢わず、妨げられず、一石二鳥
★五時——七時 すこし眠ります春眠のみならず一年中眠を覚えず一世の中に寝るほど楽はなきものを起きて働く馬鹿もありけり」と感じるのもこの時刻。軽いパン食とコーヒー位の朝食
★八時——十一時 学校のある頃はそろそろ出勤の用意もしました。浪人生活の今は悠々自適、(これはすこし負け惜しみかな?) 新聞雑誌に目を通し数十通の投句、書翰の整理(但し新聞選句、ラジオ放送句の整理など
★十二時——十六時 風食は時を定めず喰いたければ喰い、喰いたくなければ喰わず、こゝのところ「徒然草」の盛親僧都をつくり。でも芋はあまり好まず南瓜も同様の所はW型でないらしいです。午後は軽い散歩をし空腹になれば軽い洋食か支那料理に手をつけず。間食は一切せず、酒アルコールの類は生来一滴もたしなまず、と云つてゼンザイ一杯もたべられぬ不調法さ武蔵の二刀流を羨む。煙草もの



まず、そのくせ堅つくるしい理屈やお説教式典の時の祝辞、嘘つパチの弔辞などきくのは大きらい。明朗な雑談などで時を忘れること屢々。

★十七時—十八時 磯の鶴の鳥のように日暮に帰ります。尤も午後からの散歩も買物や新聞社への用件又は女子短大の講義がてらで映画もほとんど見ず。家族も映画を見たいときは勝手に行かせますが、家族もいゝ音楽映画位でなければあまり行かず家でピアノをボンボン叩いています。

私だけは白河夜船に乗じて波の

大阪市 麻生 乃

★一時—三時 川柳雑誌社の社員として会計事務と国海外への通信事務に此の時間を使用します。家政婦のおぼさんの休みの時は衣類の修繕、裁物、アイロンあてに使います。

まに〜深いです。
★二十一時—二十三時 白河夜船漂流中。と申して源氏物語帯木の巻雨夜の品定め「繋がぬ船の浮きたるためしもげにあやなしさは侍らぬか」のような浮気心ではなく一切合財忘我の恍惚境です。
★二十四時—再び上陸これから又活動に入ります。どうも夜中型になったのは「世の中に人の来るこそうるさけれ」とは云うもののお前ではなく「煩雑さから避けて習性となつたらしいやうです。

★四時—六時 睡眠中。午前零時を中心とする八時間が最も理想的な睡眠時間なのですが、それは私のボジションのゆるさぬところ、この三時間が私の熟睡中、夢も見ずたまに見れば羽根をつけておそろしく高い空へ舞いあがってる夢や、道頓堀の檜舞台へ台本も見ずに現われ台詞がわからないのでヤキモキして

★十時—十一時 風と夜の食事に充てる副食品の買物。おぼさん休みの時は家の掃除や風食の準備でお台所でバタ〜。
★十二時—食事は午後一時頃にすることもあります。
★十三時—十六時 おぼさん休みの時は洗濯。或は来客の応接などに使用いたします。風の間食は何か好きなものがある時は頂きますが別に外国式にテイータイムを定めて居りません。欲しい時に飲んだり食べたりして

★七時—心は起きているが眼の神経を休めるため眼臉をとじている、七時三十分前起床。
★八時—一歩(三男)を会社へ出すための準備中。
★九時—家人と云つても今は路郎と私の二人きりのくたびれた同志の差向いの朝飯です。残った御飯の都合でパンとミルクに

★十七時—夕刊の来る時ですが夕刊でも朝刊でも私はよみません。報道記事をやむために新聞を使う位なら少しでも知識欲を満足させて呉れるようなものを
★十七時—夕刊の来る時ですが夕刊でも朝刊でも私はよみません。報道記事をやむために新聞を使う位なら少しでも知識欲を満足させて呉れるようなものを
★二十二時—二十四時 一歩が会社から帰って来るので夕食の準備をしてやります。これから十二時まではフリーなのですが矢張り自分の楽しみに使うことはあんまりありません。年中仕事があとから追っかけていますから……。





川柳第二教室

作句指導

戸田古方

研究題「水」

益々ふえてきた授句のなかから、今月は「どこがよいのか」「どこを直したらよいか」「?の句」「テニオハの問題」「あきたりない句」という風なわけ方をしてみました。

○どこがよいのか

生きかえるお冷やへすまぬ二

日酔

真路

「お冷や」と「二日酔」は誰でも思いつくこと、「生きかえる」に助けられながら、「すまぬ」がこの句のいのち。

キャラバンの夢路は水の湧くところ

真路

あえて「オアシス」としなかつたがお手柄。

散水車蟻の行列遠慮せず

美舟

人間という動物は勝手なもの、あえて蟻の行列でなくてもでしょうが、行列という面白いことばを

生かすためにはやはり蟻でなくてはなりません。

水道の水が不思議な田舎の子

実男

平凡なようですが、不思議ということばがこの句では不思議に光っています。

ダムの水ひた／＼と祖父の田へ

どんたく

一読、静かだがおそろしい句だとドキンとしました。ひた／＼がそろさせたのでしよう。庭の草木へ水をやれまづている

単なる草木の問題でなく、生活を感じます。まっているのは草木でなく句主なんでしょう。

水一つ打つにもそつのない動き

広助

茶道を学ぶと身にそなえが出来る」と申します。一挙手一投足をつけないところ、美しい人生が見られます。

汚水を飲んでいる犬のたくましく

みちる

人間の悲哀、文明の悲哀でしょう。「たくましく」を生じているものは「汚水」でありそして「犬」です。

水やはり海へ出るべく流れて

豊年

なんやあたりまえのことやないかというところですが、そのあたりまえを発見のおどろきで表現したのが「やはり」と「出るべく」の「べく」です。

凸凹があるとは見えぬ水の底

微酔

竜安寺の石庭と瀬戸内海、青い大陸とマナスル登攀、水の底だつてどこもかしこも平ではないのです。宇宙の神秘をとらえたことは前の句と同断、「あるとは見えぬ」という素直なことばの深さを見逃さないように。

飯を炊くのに火加減、水加減、仕掛けておいてくれ、ばガスをひねるくらいは出来ませんが、その水加減を鼻唄まじりにしてのけると見えるとも見えぬ主婦の気苦労を

水鏡儂りのない素顔なり

義夫

鏡台の前ではよろすをしても、水鏡ではコンパクトもつかえますまい、「儂りのない」は「素顔」の上にびつたりくっついていきます。

京の水やつはり皺は出来るなら

恵二朗

海にそゝぐ水と同巧、「やはり」とせず「やつぱり」としたところに京のカラーが出ています。

雨は水に過ぎないよとはあわれ

恵二朗

「とは」はいるかいらないか。ない方が余韻がありそうにも思えます。「過ぎないよ」が発見、悟りにみちびきます。

水

八文銭

加賀の千代ばりです。しみ／＼は誰しも経験のある心境。

浸水家屋五千大阪の隅つこて

静観堂

さすが大大阪、五千ぐらいはほんの隅つこの出来事にちがいありません。

水掛がどうのこうのと下手な菊

雪山

下手な菊造りだから「どうのこうの」がよく利いています。

○どこを直せばよいか

談たま／＼金に及びて水臭く

正直

「談たま／＼金に及びて」とくと全く文語調で、句主はそれを意識していられるのでしようが、あまり道具が揃いすぎています。

金のことになって話が水臭くとか「さてどうするかで話行詰まり」。しかし「且那寺喰わしておいてさていゝ」にはとてもかたみません、且那寺の権威も信用も

暑中御伺

菊沢小松園

大阪市阿倍野区玉子町三丁目三四番地 電話 66 六六七七番

大鉄局支部

- 野村初甫 塚脇笑太
- 桂野千草 浅野飄太
- 吉原紅月 堀須賀太
- 永尾英断 松川杜的
- 柴垣三吉 阿万万的
- 植村客遊子 正本水客
- 丸川愁電子

川雑高知支部

大西迷窓

有友玲羊

会員一同

川雑前備支部

- 浜田久米雄
- 大森娛句楽
- 永松東岸子
- 三村柳風子
- 外一同

ないものゝ世界では水臭くもなり
ましよう。

水喧嘩祖父の傳統繰り返し

好日

水喧嘩しようこりもない祖先
の血ぐぐらいでどうですか

海難の舟に水々水の夢

古意知

海難の舟は難破船とか漂流とか
のことはで代えられないものでし
ようか

せゝらぎの湧き水を煎じてや
りたい役人

桐生

清廉潔白といふたいのでしょ
う。「せゝらぎの湧き水」は下関
をまわつて裏日本經由東京行とい
う感があります。

あまりにも違う水々水のさま

堯二

堯見の句なんですが、「あまり
にも違う」はあまりにもあまりに
もです。今一步工夫を願います。
佳句になります。

手ばかりな政治を怒り水見舞

牧人

天災であつて天災でない、政治
を怒るのはよいのですが、も少し
上手に怒つて下さい。

○?の句

大獅子吼コツブの水が定まら
ず

英断

「定まらず」は卓をたたくので
水がゆれるのか、一寸わかりかね
ます。感じが出ていることは出て
いますが、
水着から乳飲ましてる晝休み

錦花

水着とありますので海水浴とも
みえますが、そうすると昼休みが
落着きかねますし、風景がのつて
来ません。

夏捜せの水のむてかいのど佛

忠

「のむてかい」は「のんでたま
るか」でしょうか、夏捜とつゞいて
来にくいし、
○テニオハのこと

水道の洩りも役所の判が要り

英断

「洩りにも」と「に」が入れた
いのです。たゞ「も」だけでは並
列の感じよりしませんが、こんな
ことまでもという感じを強くする
にはやはり「に」がほしいところ

です。

○あきたりない句、
嘸み込んだ水に返事がむせ返
り
水溜に雲美しく映りおり
湖鳥

柳叟

一つばいの水にうまいとロガ

花車

寄り
鉢植に水ぎやるほど癒近く

一鶴

奇を求めただけが川柳ではあり
ませんが、やはり引きつける何か
はほしいと思います。

研究題「読書」
(メ切)八月十五日
(発表)十月号予定
(投句先)

豊中市本町三丁目二〇一

戸田古方

同

松山市 前田 伍健

ガイド馴れして洋服のお寺さん

奥様の帯人形え惜気なし

山へ来てすねて甘えて風邪をひき

憤る眼が向く千島沖縄え

そういえば安全地帯ない日本

長野県 高峰 柳 児

お忍びで探ぐる情緒の灯がまぶし

その口の達者を労組に買われ

戦後派の社長金釘流で書く手形

ブランコへ母寄せ付けず高く揺れ

和歌山市 秋 月 宏 方

ここの娘の部屋にもひばり錦之助

オートメーション人は遊べという如し

大阪市 石田 沐天

役得も汚職も出来ぬ席で老い

八月の風は跨間を通しとき

今治市 長野 文庫

買いそうなものとチャルメラ自棄に吹き

団体ヘラムネが足らぬ山の家

日の出など珍らしくない牛乳屋

商品として大学へ押しかける

そんな筈ないが巡查にどきんとし

敦賀市 船 木 夢 考

割勘で乗る自動車に押し込まれ

信仰のお蔭で骨を折っただけ

兵庫県水上郡水上町小野

戸 倉 普 天

南区医師会文化部

寄 林 川 柳 会

(編者不明)

河 村 瑞 川

牟 田 一 哲

中 島 生々庵

中 島 とし代

安 岡 珊 枝 郎

海 野 比 呂 史

田 中 烏 耕

平 尾 太 希 志

岩 崎 一 伸

山 川 阿 茶

仙 波 杏 子

中 村 放 生

川柳雑誌社鳥取支部

鳥 取 川 柳 会

一 同

橋 本 緑 雨
大阪府東住吉区平野西
之町八三



よく笑う男を頼りなくみつめ
浴衣着たひとに紫陽花似て涼し 大阪市
番台へ預ける指輪さしてくる
帯解いてから老妻は茶を淹れり
手にとれば案外小さいカップなり
湖の孤独は雲を映すのみ
絶安のまゝでとう／＼梅雨が来る 兵庫県
川蟹も背伸びして見る梅雨晴間
別天地などと山家をほめてくれ
死花のつもりの普請から達者
長男のマンボ親類から文句
労基法がどうあるうとも農繁期 広島県
手ばなしのあくびも出来る妻と
スポーツに興味のラジオを又取られ
ツアルト何処が良どと気の毒な
おしめ乾す暮しへ小唄すすめられ 今治市
吉日は障子の穴で覗かれる
ダンスなどと愚妻は汚ながり
ヒヤシンスダリヤと女嫁き遅れ
泣かされて居る子を垣根からかき 兵庫県
慎太郎刈りにして来た無精者
費い込みも出来ず女にももてず
蚊に食われながら色気のない話 大阪市
ふるさとへ帰れ帰れと蛙鳴く
人妻の杵をはずさぬ恋をもち
窓に花植えて夫婦の日曜日
芸道も地獄と同じ金次第
生活は苦しくネオンが派手につき 大阪府
雨漏りへお隣さんも派手にうけ
気のきかぬ空巢片足だけを取り
髪を梳く鏡へ肉が落ちてゆく
地味に着て女を訪ねる帯をしめ 大阪市
特二から降りて夜霧へ呼吸する
趣味みんな忘れた様にめしを炊き

同 橋高薫風子
同 文平
同 辻
同 寄金 一荷
同 月原 宵明
同 吉原 紅月
同 竹内花代子
同 石川ひさみ
同 板東千代美
同

下駄ちんと揃えてあげるだけの恋
君からの便りで肩のこりが取れ 岡山県
月食を見る子の連に起される
猫の手もほしい麦秋杖で出る
雨乞いをすれば放射能ふりつづき
初恋は老妻よりも六ツ上 伊丹市
観る人も脳天壊る名画展
渦巻に頼り切つてて蚊にくわれ
まだ生きてますねと金魚ほめられ
草を食む牛をバックに一つ撮り 神戸市
おとんぼが飛びつく期待門をあけ
ビキニから諸行無情の風が吹き
神妙に音楽会で眠つて来
手内職ある電柱へ立ちどまり 大阪市
下手な謝辞仲居のひぎでかか冷え
席を立つチャンス和尚は見のがさず
後添いの話仏壇しめに立ち
鉢破った元氣も病人褒められる 大阪府
退屈に掴まえられた小半日
絹物で暮すホクロに自信持ち
親切も出来て退院近くなり
晴耕雨読放射能恐怖症 天理市
膝小僧抱けばこいつも冷たがり
正確な時計を療養所で自慢
製材が休めば蟬が鳴いており
只読みがマッチ貸せとは凶々し 大阪市
世辞笑いも阿呆らしい程店は閑
夏枯れの店に動かぬ熱帯魚
雨の日のブラッドバンク良くは
遇う人に顔見てほしい乳母車 高田市和
もう脱げぬとこまで脱いで冷奴
早起もいつしかクセにされている
オートバイ息子同志は買う話
療養所思い思いの方拜み 鳥根県

同 杉本たつよ
同 小川静観堂
同
同
同 仲どんたく
同
同
同 本多 省三
同
同
同 藤本 千永
同
同
同 菱田 満秋
同
同
同 西川 晃

<p>吾郷玲人 大阪市住吉区御崎町一丁目 呼⑥〇五六二(山田)</p>	<p>長野井蛙</p>	<p>川柳雜誌社米子支部 松露川柳会 事務所米子市道笑町一ノ三四 電話(米子)二一九六番</p>	<p>帝化川柳会 帝國化工大阪工場内</p>	<p>佐野白 谷 一平 清水一朗 正口辰始 和田寛峯 角谷三平 川島葉乙女 帝國化工大和田分工場内</p>	<p>深見雅堂 松下京一樓 谷沢好祐 井野川甲子朗 米永耕山</p>
---	-------------	--	----------------------------	---	--

同 會 柳 川 3.3.3



ものゝ本とマンガの知恵を売る
後姿撮って花嫁かつら脱ぎ

小魚を食べて胎児を護りぬき
玉手箱開けた様に父白くなり

妾宅の猫に來世は生れたし
何事も言うなと虫の良い話

乱闘をする程国を思とらず
方田に従う水が土手を切り

一台のテレビで店の模様更え
放浪の旅と別るる養老院

恋しきは鮎のうるかに一級酒
暇潰しですよと釣れぬ魚釣り

満貫の興奮電車まで続き
オムライス卵の薄さにある技術

掌と知らず宿かり足を出し
素うどんと言えば氣のない返事

たかが蜘蛛ごときに男の力借り
三坪半立体的に畑作り

突る程幾度と通う裏畑
共稼ぎ同時に切れた定期券

五つ玉四つ玉社内にあるリズム
夕立を迎えに出れば虹が立ち

お帰りを待てば糸までもつれて來
表向き女嫌いがあの目付き

七夕を楽しませつゝ孫を寝せ
孤独さはせめてコケシを寄り添

一本で寝る善人の父の顔
アルバムで見れば校長いい男

雨降って地固まらず別れ切り
あの顔に似合わぬ白い足で來る

パンくづを使うてお三時さま
のないおニューひばりへ御行列

往復のない人生をすねている
潔癖の煙管を借ればつまつとり

同 香川 雅人

同 富永 建朗

同 野呂 湖島

同 青木 微醉

同 永松 道雄

同 加納 幸児

同 山本 立見

同 小島ささぎ

同 瀬戸 松雪

同 越智 義夫

同 坂手 年子

同 佐内 隆文

同 小松 梅林

同 河井 庸佑

同 仲野花鶴美

同 金子 紀人

同 徳永 貴美

手料理のテキ算盤で切った味
すげ笠の母のたすきが若う見え

初舞台パパのカメラがでんと待ち
アベックへ螢も灯り消して越え

おしっこだけが言えない子へお灸
曲線美デザイン程に生きてこず

正妻へテレビ二号に洗濯機
月世界地球の恋へ傘をさし

落選もやっぱり違反しかられる
若き日の奇行を話し酒座樂し

よごすとは染る事なり京染屋
正札で買ったと妻へ筋をたて

大げさに叩いてマダムついでくれ
愛人と言えば体裁よい二号

いびき聞けばどんな豪傑かと思
親馬鹿と言われたことが嬉しくて

融通の効かぬ男に金が出來
課長には成れず委員長が生き

委員長そろそろ保守に成りかかり
咲ききってバラ隠居所を派手にする

たまに居る日は坊より悪いくんば
ペン先さらさら全快の知らせ

放射能とかや帽子の売れること
ながし目は懐のほか用はなく

ホーク手にだらりの舞をみる斜め
割勘にかみつき相な口になり

お化粧の努力だけは買ってやり
服で下駄隣は何をする人ぞ

貧しさが鍛えるのだと子を論し
螢狩り下戸だけ螢見て帰り

雨々々叱りきれない子沢山
励行と書いて司会の遅れて來

酔わせる氣酔うて見る氣の差向い

同 小田 紫草

同 前川左文字

同 木村 紅帆

同 御戸 凡平

同 丹波 太路

同 横田 放人

同 井上美恵子

同 中村九呂平

同 奥谷 弘朗

同 釜田 坡青

同 沢田 美喜

同 室井八九寸

同 三上 春雄

同 岩田天保銭

同 安平次弘道

同 中川 堯二

同

暑中御伺

右京嵯峨伊勢ノ上町
岩見とくじ

同 岩見 キヨ

同 今田 蘇海

同 井ノ下 晴芽

同 井ノ下 秀徒

同 大鶴 喜由

同 田中 千潮

同 田中 烏雀

同 竹松 九角

同 楠 光二郎

同 柳本 憲一郎

同 八木 迷々

同 小林 龜一

同 溝川 ちか子

同 平井 絵丘

同 平岩 司郎
同 本儀 親生

川柳雑誌社
大聖寺支部
石川県江沼郡大聖寺町
字永町四八



中島とし代さん を訪ねて

(女流作家訪問記18)

丸尾 潮花

前不朽洞会理事長として多年お世話を頂きました医博中島生々庵先生の夫人とし代様を南区麩谷の小児科診療所にお訪ね申上げたのは初夏の陽射しが西の端に沈もうとする頃だった。訪問間もなくして生々庵先生もお帰りになりお二人で愛想よく応接間に迎えて下さる。扇風機の風にやっと思きから自分を取戻した頃、小唄の稽古日なのである、三筋の糸の音じめが艶っぽく流れて来た。

「今日は稽古日ですか」
「そうやねん」と先生が笑いながら応接を出てゆかれる。
「奥さんも小唄の方を」
「先生(中島先生)と一緒に習っているんですけれど、なか／＼です」と笑いながらお話しになる。とし代奥様は絵筆にも先生と一緒にその研えを見せていられる。
「舞踊もお稽古になっていられる様に、葎乃先生から伺っているんです」
「小唄舞踊を二つ三つばかり先生と一緒に習っているんですけれど、此れもなか／＼むつかしくって、二つ三つ位ではとても歌目な

「小唄舞踊が大変に盛んになりまして端唄と言ったものは極いいものでないと習われる方も少くなりましたね」
「小唄は何派なんでしょう」
「廻派なんです。名を取る様に進められるんですけれど、あんなのが名取りかって言われますとね。それに後々のおつきあいと言うのが亦大変です」
「そうした事は舞踊でも同じで、いつももう少し何とかならないものかと思えます。私などもお断り出来ない舞台は大変でした。阿茶さんは小唄の名取りさんでしたね」

「え、あの方は名を取っていられます。川柳もなか／＼の多作家であります。すのぶの医師会の句会でもすぐノートに一杯作句されるんです。三十句位は平気で作句されていきますが、私などはなかなかできていません。此の間の句会では請求書とやら題が出ましてね。私などは請求書などと言うものには視野が狭いと言いますのか一つも句が浮んで来ませず、出しませんでしたが、男の方は何でも請求書に水まじりされていると言ふ意味の句

をを作句されていきました。あゝした事は私など女性にはわからない世界の様にも思えるんです」
「そうでしょうね。いつか梨里さんの言われました様に女性の方には想像も出来ない題があるでしょうね」
「そうなんです。私など商売関係と言った風なものですと困ってしまふのではないかと思えます」
「十七日に岸和田地区で川雑婦人友の会を持ちましたが兼題に帯と言うのが出されました。こゝろみ、男性の方と女性の方と別々に作句して頂き、女性は女性の選者、男性の句は男性の選者にそれぞれ選をして頂きました。ところが女性の方と男性の方の作品の観点が全く違っているのですね。男性の方は帯をとっても色っぽく作句されているんです。たとえは誘惑へ帯のゆるみをふと感じと言ふ風に、それが女性の方からはそうした句が見られないので

もの色っぽく感じられるのに女性の方は実質的に考えられるのですね。戦前の夏子さんの句に
袖丈二尺御所車まづぶたつ
と言うのがありました。此れ等の句は矢張り女性のものであり、男性には遠い着想ではないかと思いました。
「そうでしょうね。男の方で着物の裁ち方と言うことはおわかりになられる方が少いでしよう」
「戦前の話ばかりになります、振袖と言ふ題が出ましてね。選者が困り、丁度席上に居られました美奈子さんに振袖ってどの程度のものでしょうかと聞かれた事がありました」
「私も以前そうしたお話を承って居りましたが、振袖と言いますところを見ますと、中振、大振とありますが、いずれにしても二尺以上のものではないかと思えます。それに振袖と言ふことになりまますと普通お召とかそうしたものはなく、矢張り裾模様と言ふことになりまます。中振にしませともね」
「大振袖と言ふ様な裾までのものは花嫁衣裳か舞台にしかあまり使われない様ですね」
「それでしようね」
「参考になりまして有難う御座いました」
「昨夜医師会の句会が有りまして先生と出かけてましてね。罰金を取られて来ましたね。医師会では句が抜けましたら罰金を出すことになつて居ります。平拔が二十四、天が八拾円、地が六拾円、人が四十円ですか。そしてね。一題で一人が天地人を取りますとね罰金が倍額になるんです。そしてそれが会の資金になりました、お祝いや御不幸に使われるんです。
昨夜は先生と二人で千円渡しまして罰金のお釣りを二十四円でしたか頂きました。自動車にも乗れないと笑いました。応接間にもかけていられるのは路郎先生の揮毫の額

で
一握りあゝ人生は和にしかずの句で、中島先生御夫妻のあらゆる趣味を通じてのお睦しい日々を一層強く感じさせられた。グラスに盛られた冷たいジュースが扇風機の風に小さな波をたてている。川雑婦人友の会への御支援をお願い申上げてお別れする頃には南大阪の心音橋に美しいネオンの灯がまたたきはじめていた。
次は山川阿茶さんを訪ねて

「奥さんも小唄の方を」
「先生(中島先生)と一緒に習っているんですけれど、なか／＼です」と笑いながらお話しになる。とし代奥様は絵筆にも先生と一緒にその研えを見せていられる。
「舞踊もお稽古になっていられる様に、葎乃先生から伺っているんです」
「小唄舞踊を二つ三つばかり先生と一緒に習っているんですけれど、此れもなか／＼むつかしくって、二つ三つ位ではとても歌目な

「小唄舞踊が大変に盛んになりまして端唄と言ったものは極いいものでないと習われる方も少くなりましたね」
「小唄は何派なんでしょう」
「廻派なんです。名を取る様に進められるんですけれど、あんなのが名取りかって言われますとね。それに後々のおつきあいと言うのが亦大変です」
「そうした事は舞踊でも同じで、いつももう少し何とかならないものかと思えます。私などもお断り出来ない舞台は大変でした。阿茶さんは小唄の名取りさんでしたね」

「え、あの方は名を取っていられます。川柳もなか／＼の多作家であります。すのぶの医師会の句会でもすぐノートに一杯作句されるんです。三十句位は平気で作句されていきますが、私などはなかなかできていません。此の間の句会では請求書とやら題が出ましてね。私などは請求書などと言うものには視野が狭いと言いますのか一つも句が浮んで来ませず、出しませんでしたが、男の方は何でも請求書に水まじりされていると言ふ意味の句

をを作句されていきました。あゝした事は私など女性にはわからない世界の様にも思えるんです」
「そうでしょうね。いつか梨里さんの言われました様に女性の方には想像も出来ない題があるでしょうね」
「そうなんです。私など商売関係と言った風なものですと困ってしまふのではないかと思えます」
「十七日に岸和田地区で川雑婦人友の会を持ちましたが兼題に帯と言うのが出されました。こゝろみ、男性の方と女性の方と別々に作句して頂き、女性は女性の選者、男性の句は男性の選者にそれぞれ選をして頂きました。ところが女性の方と男性の方の作品の観点が全く違っているのですね。男性の方は帯をとっても色っぽく作句されているんです。たとえは誘惑へ帯のゆるみをふと感じと言ふ風に、それが女性の方からはそうした句が見られないので

もの色っぽく感じられるのに女性の方は実質的に考えられるのですね。戦前の夏子さんの句に
袖丈二尺御所車まづぶたつ
と言うのがありました。此れ等の句は矢張り女性のものであり、男性には遠い着想ではないかと思いました。
「そうでしょうね。男の方で着物の裁ち方と言うことはおわかりになられる方が少いでしよう」
「戦前の話ばかりになります、振袖と言ふ題が出ましてね。選者が困り、丁度席上に居られました美奈子さんに振袖ってどの程度のものでしょうかと聞かれた事がありました」
「私も以前そうしたお話を承って居りましたが、振袖と言いますところを見ますと、中振、大振とありますが、いずれにしても二尺以上のものではないかと思えます。それに振袖と言ふことになりまますと普通お召とかそうしたものはなく、矢張り裾模様と言ふことになりまます。中振にしませともね」
「大振袖と言ふ様な裾までのものは花嫁衣裳か舞台にしかあまり使われない様ですね」
「それでしようね」
「参考になりまして有難う御座いました」
「昨夜医師会の句会が有りまして先生と出かけてましてね。罰金を取られて来ましたね。医師会では句が抜けましたら罰金を出すことになつて居ります。平拔が二十四、天が八拾円、地が六拾円、人が四十円ですか。そしてね。一題で一人が天地人を取りますとね罰金が倍額になるんです。そしてそれが会の資金になりました、お祝いや御不幸に使われるんです。
昨夜は先生と二人で千円渡しまして罰金のお釣りを二十四円でしたか頂きました。自動車にも乗れないと笑いました。応接間にもかけていられるのは路郎先生の揮毫の額

で
一握りあゝ人生は和にしかずの句で、中島先生御夫妻のあらゆる趣味を通じてのお睦しい日々を一層強く感じさせられた。グラスに盛られた冷たいジュースが扇風機の風に小さな波をたてている。川雑婦人友の会への御支援をお願い申上げてお別れする頃には南大阪の心音橋に美しいネオンの灯がまたたきはじめていた。
次は山川阿茶さんを訪ねて

お酒の前後に

丸手大B12

二日酔い 悪酔い 肝臓疾患 悪酔い

武田薬品

25錠 55錠 100錠



源義朝 (上)

— 為朝 — 義平 —

富士野鞍馬

は、次兄後白河天皇を即位させられた。

そこで、崇徳上皇は、藤原頼長（関白になりたがっていた）を参謀にして、源為義、為朝、平忠正（清盛の叔父）等の武士を用いて、兵を挙げられた。

「日本外史」に「義家ニ六子アリ。義宗、義親、義国、義忠、義時トイフ。義親ハ対馬守トナリ、罪ヲ以テ誅セラレヌ。子ノ為義ハ幼ニシテ孤ナリ。義家之ヲ奇トセリ。義家卒シ、為義直チニ義家ノ後ヲ承ク。為義ニ二十三子アリ。長ヲ義朝ト曰イ、尤モ戦ヲ善クス。相模ノ鎌倉ニ居リ、関東ノ家人尽ク之ニ附ク。下野守トナレリ。第八子ヲ為朝ト曰ウ。猿臂（肘が長い）ニシテ射ヲ善クセリ。幼ニシテ諸兄ヲ凌犯ス。為義之ヲ思イ、之ヲ豊後ニ逐ウ。鎮西八郎ト曰ウ」とあり。そこで保元の乱がはじまった。

久寿二年（一一五五）近衛天皇が崩御になり、帝の長兄崇徳上皇が、帝位に戻ろうとしられた（その御子重仁親皇を皇位につけようと思はれたともいう）が、御父鳥羽法皇

い腕の筋を抜かれて、大島へ流された。

これが保元元年のこと（一一五六）で、保元の乱である。川柳は、この為朝が大島へ流されたのを詠んで、

為朝は片袖わりを入れて着る
（タル一〇二）

為朝は片袖わりを入れて召し
（〃 一六七）

と、肘の長かったことをよみ
八郎と八左は島に名を残し
（タル一一八）

八郎も八左も島の主となり
（〃 一一四）

八郎は八反九郎蝦夷錦
（〃 九二）

等と、為朝を八郎といい、九郎は義経のことで、八反も蝦夷錦も織物の名である。為朝は八丈島へ流されたという説もあり、義経は、北海道（蝦夷）へ逃げたともいうのでこの句がある。

為朝はまづふんどしに氣を配り
（拾 五）

八丈島は、女護島ともいわれていたもので、こんな句も見える。

その為朝は、前に九州へ追われても、勝手に総追捕使と称し、十五才で、九州一円を従えて、鎮西八郎といったが、その為、父の為義は、役をやめさせられた。これをき

て、為朝は、京都へ帰って謹慎していた時に、保元の乱と なったのである。

大島へ流されても、やはり強かったので、近くの五つの島を占領して、威張っていたが、遂に朝廷の軍に攻められて、琉球へ逃げたということになってはいるが、大島で、三十二才で自刃したと史書にある。

崇徳、後白河は兄弟。為義、義朝は親子。忠正、清盛は叔父甥。こういう骨肉相克は、昔よくあったことである。

この乱の結果、源平両氏が、天下に巾を利かすことになったが、義朝は、従五位下左馬頭、清盛は正四位下播磨守で、共に昇殿は許されたが、義朝はよく戦ったのに、清盛の下位に置かれたことが不満で、あせり気味になっていた。

たまたま、藤原信頼は、右近衛大将になろうとしたが、藤原通憲（入道信西——清盛の姻戚）に、それを妨げられたので、信頼は、義朝を味方に入れて、平治元年（一一五九）十二月、兵をあげて、通憲を攻め殺し、皇居を占拠し、自ら大臣大将になり、義朝を従四位下播磨守に任じ、

子の頼朝を右兵衛佐に任じた。

その時、清盛は、熊野へ参詣に行つて不在であったが、急をきいて、いそぎ京都へ帰つて、後白河上皇と一条帝を、六波羅に迎えて、一族三千余騎で、義朝軍を攻めた。

この時、源頼政は途中から清盛方について、共に義朝を攻めた。義朝は、東国兵、二千騎で応戦したが、遂に敗れて、東へ逃げたのであった。

これが平治の乱で、この戦で、義朝の長男義平は、清盛の長男重盛と、紫宸殿前で一騎打したが、義平が強いので重盛は逃げたという史談がある。

義平は、武勇強悍、悪源太といわれ、敗戦の後も、単身京都に居て、平家を説いてたが、その翌年、永暦元年正月二十五日、父義朝の死を聞いて、石山寺に潛伏中を捕えられ、六条河原で斬られた。この時二十才であった。

悪源太ゆうれいなどは手ぬるがり
（拾 五）
悪源太八丁上つてはらをたち
（タル 四）
清和源氏のごろつきは悪源太
（〃 七八）
幽雷に鳴て出たのは悪源太
（〃 一一五）

等と、義平を浄るりに脚色されたのを、川柳は詠んでい

近作柳樽入門(一)

雑吟は

身辺雑記か

北川春巢

「近作柳樽」の選の一翼を担って九二年、いさゝか感慨なきを得ず。折から編集局より求められるまゝ、初心者を対象として感想を書いて見た。

一、近作欄の句と

題詠吟との違い

一般的に申しまして、川柳の初心者は題詠から入った人が多いと思います。友人に勧められて句会へついで行き、はじめて行つて二句も抜けたので、その時から川柳がやめられなくなつたとか、或は雑誌や新聞等の募集欄に題が出ていたのははじめて応募したのが入選して、川柳のやみつきになつたと云う人が多いようです。そんな人が近作欄へ投句して見ると案外抜けないので、又々腰くだけになつて、川柳に対する希望を失つてしまふのではないかと思ひます。然らば句会或は課題吟で抜かれる句と、近作欄で抜ける句とはどこか違う所があるのではなからうか、と云う疑問も起ると思ひます。句の批評をする時にも、よく

が句会や課題吟ではよく抜けて、近作欄では抜けないのは当然と思ひます。稀にはどちらにもよく抜けると云う「おませ型」の人や、句会では抜けて、近作欄ではよく抜けると云う「天才型」の人もありますが、これは例外的で、普通には題で作る方が作り易く、雑吟は作りにくいものと思つて頂いてよいと思ひます。然し、作りにくいからと云つて、川柳をはじめて数年にもなるのに、題詠吟ばかり作つて雑吟は作らぬと云うのも、どうかと思ひます。

近作の選をしておりますと、投句籠に二十句重ねて書いてある句が、どれも皆何かの題で作句したのを、雑吟として投句されたのではないかと、と思われれる場合があります。毎日の平凡な生活から何かに心につれたことを発見して句を作ることは、楽しみは楽しみながら、仲々むつかしいことでもありますので、会社員なら毎日会社へ通勤の電車の「ラッシュ」とか、商売人なら買物に来た人に渡す「釣銭」とか、農業に従事している人ならば、毎日の仕事に使う「鋏」とか云う具合に、自分で自ら題を出して、その題で十句も二十句も作句して見ることが大切なことであり、又是非やつて頂かねばならぬことでもあります。投句籠に書き連ねた場合、それらの句がその題で課題吟式に作られたものだと思ひます。選者に見抜かれるようではまずい、と私は思ひ

ます。尤もどこかへ旅行したような場合に、その旅行に因つて連作したと云うような場合は別であり

ます。或る題で作つた多数の句を近作欄に投句された場合に、たとえそれが句会で抜けた句であつても、雑吟としては頂けぬと云う理由の一つは、(勿論頂ける句もあるのですが) 次のようなことも考えられます。それは、川柳は穿ちとか滑稽とかと角一つの発見でなければならぬのですが、題で作つた句の発見している事柄が、雑吟として抜く程の価値がないことによるのではないかと思ひます。小集で同席の者をおつと云わせたような句、それは恐らく些細な発見でありまして、小集の場合におきましては、お互の共感を呼ぶために、あつと云わせることが出来るのであります。然し大句会或は雑吟として見ます場合には、その発見が小さ過ぎるがために、選者の共感を呼び起し得ないのであると思ひます。そんな所から、雑吟は句会吟よりもむつかしいと

か、レベルが高いとか云われるのであらうと思ひます。

二、雑吟は身辺雑記か

サラリーマンが「ラッシュ」の句を、農夫が「鋏」の句を作ることは、是非やつて頂かねばならぬ、と前に申しましたが、これが所謂身辺句であります。毎日見慣れた身辺の様

子やら、その時の感想やらを句にするのは、特に初心者にとつては楽しいことでもありますので、お勧めしているのですが、「雑吟とは身辺雑記のことか?」と聞き直つて質問されますと、無条件に「そうだ」とは答えかねるのであります。雑吟の中には自分の思想を句にしたものもあり、小説を読んで感じたことを句にしたものもあり、大事件に遭つた際の人生観を句にしたものもあり、身辺のこと以外に色々あります。身辺雑記は雑吟でありませんが、その逆は必ずしも真ではありません。

その句主の職業も何も分らぬまゝに、投句籠に向つて選をしておりまして、身辺句を詠んでおられるのを見ますと、自分の生活なり仕事を、如何にも楽しんでおられる様子が目に見えるようです。選者も爽に愉快なのであります。その作者の職業も、句を通して大凡に分りますし、又月を逐つてその作家の句を見ておきますと、(そんな作家の句は、特に注意して見るようになるものです。)その精神の成長ぶりもろろかゞえるのであります。

とまれ雑吟は身辺雑記そのものではないと思ひますが、身辺雑記からはじめるのが初心者には入り易く、平凡な日常の身辺から川柳味を発見して句にすることは、古い作家にもた易いことではあります。身辺雑記は川柳作家にとつて誠に興味深いものであります。

(身辺句については、路郎先生著「川柳とは何か」、を参照して下さい。)

初孫をカメラに納めてくる便り 詩 郎

雑川 下関支部句会

石川侃流洞選

こそ泥が頭かきくわびを云い ほなみ
 内暮を聞いて寄附金妥協する 伊三男
 向学の子へ内暮は秘めておき 成理智
 度の過ぎた正直内暮まで話し 九呂平
 内暮をぶちまけ遠慮のいらぬ仲 一規
 内暮はちやんと知つて御用聞き 吐泉
 内暮をさらけ出した嫌意期 達夫
 無心状ペンで書いたが気に入らず 古山
 ペン先の教までひびく予算減 茂美
 難問へペンも思わず固くなり 雪夫
 書士でないペンへ役所の風当り 藤四郎
 言いくらいことスラスラペンの先 竹涼
 気性そのまゝペンの太い肉 司樓
 ペンにも出来て五十の坂を越し 柳慶
 ラブレター時間も書いてペンをおき 鳥石
 コレクション自慢の品の長談義 蘇人
 金を持つ腕が世界の絵を集め かりたる
 コレクション学者はしがらみがあり 千里
 偽物を時々掴む悪い趣味 芳の人
 コレクションいつかは金になりそう 成夫
 チリ箱のマツチが欲しいコレクション 侃流洞

雑川 大聖寺支部句会 (石川県)

野村味平選

塵埃箱へ姑は惜しい眼を見はり 独仙
 空想の世界はいつも二人きり みゆき
 空想の変化に雲も形変え 白菊
 空想へやっぱり金が先だった 柳作
 人気がない眼中にない河馬の顔 雲平
 人気今パンチに消えてリッ降 岬月
 大衆は気まぐれ、人気が又変り 代仕男
 代理とは見えぬ度胸で座にすわり 重信
 少年の夢漫画の中に生き 万古人
 代役の恋の濡場がもの足らず 壯
 腕力が力道山を空想し 披青
 口笛がはずみ果しなき空想 緑之助

雑川 出雲支部句会

尼縁之助選

社交界喋る言葉も型にはめ 虹橋
 花形と云われた夫は子守唄 芳雨
 銀狐社交婦人に値踏され いつ生
 社交界たゞ自惚を聞くところ 緑風
 社交下手隅へ所在なさそうにかけ 曉舟
 虚栄心強い女の社交性 斧平
 迷論に相槌打つも社交術 陽炎
 縁遠く社交ずれして美しい 柳葉
 胸さわぎ社交ダンスの夜から知り 草一郎
 社交だよ仕方ないさと折を投げ 草一郎
 前身が何だ社交の花じやもの 草一郎
 社交ずれしていやな人いやな監 草一郎
 面倒な社交は妻に任しとき 草一郎
 留学で身につけたのは社交だけ 草一郎
 社交でも俺の社交は呑む社交 草一郎
 社交術人をそらさぬ嘘もまぜ 草一郎
 女房が社交に長けて左前 草一郎
 若い妓が横目で野暮な猪口を迷 草一郎

雑川 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

アンジー親の意見が野暮に見え 草生
 野暮な客送って女将気が疲れ 虹橋
 二三年添うて夫の野暮が知れ 大彦
 妓の目には野暮な人だが金になり 馬喜々
 野暮つたい扮装がホールの眼を集め 緑風
 野暮と見て女給サレビスがらり変え 柳葉
 野暮な客五弗くれたを恩に着せ 雅一
 はつきりと送り出される野暮な客 魔花麗
 陣笠の野暮な質問冷かされ 迷朗
 犬さへも喰わぬ仲買買って出で 斧平
 野暮な客女給はもつて腹を立て 銀水
 野暮な客女給はもつて腹を立て 甚太
 女将の眼野暮さんねえと云いたそう 曉舟
 無情にも子までなしたに仲をきき 快夢起
 野暮であり夫婦の仲も無難にて 伯楽
 邪魔をして見たいと野暮な気を起し 鈴子
 野暮だぞ云われないでさすねて見せ 草生

雑川 米子支部松露川柳会 (米子市)

小西雄々報

仲よしと見せて本心さくられる 素生
 日帰りて来られまじと葉書くれ 早苗
 皿敷にソリス一つが飛び廻り 紅帆
 結婚はしたし人気が続けたし 散步
 縁側で夏を染しむ椅子を買ひ 美笑
 日帰りの忘勿草をそつと抱き 庄太
 給料日だけのソリスを買いにゆき 庄太
 色々のニユリスを生んでまだ未婚 詩郎
 仲よしの理想へ選し世界地図 素太
 戸籍上だけの未婚で世を渡り 素太
 後髪ひかれるように日帰りし 雄々
 出前屋のペタルへ踊るソリス瓶 雄々
 日帰りの温泉ゆきで疲れて来 青香
 縁側は無駄のようにも役に立ち 詩郎
 絶頂の人気スライはまだ未婚 節枝
 挨拶の手をたたく間もソリス 新雪
 日帰りて遊覧バスの腫が疲れ 新雪
 未婚だと信じた果てが相談欄 新雪

雑川 貴生川支部句会 (滋賀県)

中島可十選

この頃は柔道の腕も要る運転手 溪流
 運転手今日は大安やなと思ひ 溪流
 運転手坐り直した峠道 凡骨
 乱闘の国会カメラはつきりつかま 夢生
 大旦那の目力カメラ照れては 綾子
 かりそめの恋をカメラへ取めさき 斗志
 長生きをして孫に家出され 碧水
 故郷へ帰れず長生きしてただけ 木人
 妻の留守長生きしたと風寝する 迷羊
 速描の似顔で院長若く見え 祐子
 院長の一言ノイローゼが治り 酔昇
 院長は身上までも聞いてやり 俊昇
 院長の嘘は患者も信じて切り 美秋
 重患へ院長室の灯は消えず 四苦峯
 院長の酔うたへ妓軽う逃げ 可十

雑川 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山選

通勤者コースを変えてあやしめ 笑雷
 通勤者修学旅行へ話し掛け 青柿
 改札を笑顔で通る通勤者 流風
 初夏の山を鏡に入れて帯結び 秋月
 合併の役場へ山を越して行き 陽子
 斗病へ最後の山が手離され 千年
 山彦へ母も一緒に声を出し 美舟
 冬山の魅力担架で帰って来 葵郎
 山がにの恋を炭統蹴散らかし 承平
 かけがえの無い命をば山で捨て 七面山
 停電のランプへ昔話が出 只世
 斗病の危機へ電燈カパーされ 絹子
 母います電燈に足が軽くなり 賤女

雑川 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花選

津秋六花選

進学の酒父親が一人酔い 呆鴨
 蔵なんか無かつた昔をなつかし つね子
 蔵のある家風近所を遠ざける 実男
 俺りや酔つちいねえさで酔払い 風柳
 押ませる様に鳥居にある威厳 美実子
 あれこれ頼みに来たさ赤鳥居 箔川
 結局は疲れに行つた慰労会 仏道
 落選のドット疲れが出てしま 六花
 ハイキング無口になつた帰り道 雪峯
 酔払い路地いづばいにやつて来る 川柳堂
 蔵建て、日頃のケチを噂され 豊年
 生活の疲れが見える女の手 雪子
 質蔵で再び会つた青広服 峯松
 無病息災子供と赤鳥居抜け 九呂平
 そんな事あつたか、便利な酔払い 天作
 蔵だけを残して旧家畑なり 半休

川 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼選

遠足のお巻が腐る雨が降り 柳常
 取巻いて聞くすべも死の抗議 小菊
 くだ巻いたふりで本心ふれて 初穂
 眼界を越えた辛抱馬鹿にされ 一風
 辛抱は主人の方がする時代 針平
 辛抱へ力の入らぬ総入歯 ひか平
 一ト言を押えるツバを飲む 無鬼
 士氣上げる社長が自肚切つた酒 偶倍
 あけすけな肚で毒舌憎めない 白猫児
 肚のわからん奴やとこわがられ 越山
 肚舌が効かず御大酔いつぶれ 文平
 隅この方から酔が廻つて来 左文字
 隅からの発言譏事を一転し 英断
 巻上げてみたがおもしろい漫画なり 一雨

杏林川柳会 (大阪市)

麻生路郎先生選

支那そば屋都會の朝を寝に帰り 阿茶
 義理堅い主人アブレにしてやら 一哲
 義理故に新派悲劇の筋が立ち 放生

一片の義理に一生棒に振り 珊枝郎
 送別会義理でされてるも知らず 比呂史
 義理義理と人権などは取りあは 太希志
 パトロンが来てサーピスが悪くなり 一伸
 パトロンは自家用車には乗つて来 瑞川
 親二代パトロンの役引きける 生々庵
 パトロンの槍さびだけは聞いておき 路郎
 パトロンもそろそろ、呆ける年になり 同

大阪通信病院川柳会

田植歌流れ、カルニユス落み 夏生
 友嫁ぐニユスは淋し嫁遅れ 方正
 見送りもなく終発の旅飽 愛論
 旅の蚊帳子供のことをふと思 没食子
 乗り込んだ新婚列車で肩がこり 春雄
 コーヒーの香我がノストラルデアをかきま 露兄
 大阪のコーヒーが美味い旅がえり 史葉
 灰皿にそこらの塵も捨てて立ち 峯春
 灰皿もピカソ調になつてく売れる ハナ子
 卒業のアルバム隣りのノーベル賞 草右
 アルバムに帰らぬ妻の笑い顔 よし
 老婆もアルバムにあるセララ服 桃村
 おおアちゃんアルバム死んだ人ばかり 春巢

みをつくし句会報

戸田古方選

泡浴出に飲めぬ相手が ついでれ 圭水
 つづく苦勞も忘れられた母の顔 とし坊
 初出動足音ビルにコダマさし 義安
 ベンダントわざとなまめにつけてみる のぼる
 忘却を素直に詫言て親しまれ 繁雄
 忘却の過去へ身を証明させよ云い 清恵
 しのびよるものを感じて鏡 古九郎
 しのぼせるその足音も恋の音 凡九郎
 貧乏が馬鹿に見えても成上り 文秋
 火あぶりのさざえは泡で断末魔 日路誌

帝化川柳会 (大阪市)

佐野白水選

やつと着く茶店は婆の一人番 耕山
 文化日本山の茶店にあるテレビ 白水
 見晴しのよき茶店に美人が居 一平
 御本尊覗き込んでる不信心 辰始
 この庭でこそ薬の草履がよく写り 九州男
 パラソルの肩摺りよせる雨となり 京一樓
 泳ぐ子を追うパラソルの風海 雅堂
 金だけの魅力で且さん遊ばれる 花車
 顔よりも足に魅力のあるワッショ 利武
 魅力ある内は職場の花であり 甲子朗
 生徒にはネオンの魅力だけ残り 好祐

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

さげなくあしろう借金子の手前 とみえ
 借金も薬ですよのお世辞うけ 東雲楼
 借金を返す借金借り歩き 正博
 借金で買ったテレビと子は知れず 周一
 子の借金返えす夫婦の共稼 摩天郎
 借金が出来るも親の七光り 友子
 会費から幹事役と一寸借り 三次
 借金をしたともいえずプレゼン 克忠
 借金をする甲斐性を男とす 歌都路
 借金が出来るだけ君まだまし 増治郎
 恋愛が突り過ぎて高し鯉のぼり 星女
 石女の寂しさ一しお鯉のぼり 水品
 銀行はきつうちつて貸してくれ 柳太
 金借りに来たとは見えぬ乗用車 春吉
 借金の中へ月賦は入れてなし 路郎
 借金のまゝで死ぬとは思つてず 路郎

333会二周年記念句会

川村好郎選

実物は焼け置物に箱が付き 圭水
 実物は売れず型録だけが減り 夕霧
 実物を見てからなつた写真真似い 満春
 浪人を母が一番不懲がり 玲声
 浪人に今年も春の風寒し 好郎
 八つあたり受話器の知つたこども 好郎

八つあたり羽織のカンがはまらない 敬介
 お茶碗の音でささつた八つ当り 春翠
 粧いの鏡へ微笑おいて出る 佐久良
 微笑した黒梓へまた涙する 梨里
 内幕をかくす化粧のあつすぎて 南宗
 内幕はあんがい内気な人と知り 素男
 内幕を知つても友情なお厚し O B
 内幕を信ぜぬ二号をもてあまし 狂二
 間屋街面倒臭をうに売つてくれ 武助
 兄弟や無いかと猫ばゝする積り 雪山
 ブラカード見ずにマツチだけ貰い 一葉
 真ん中の道を譲らぬブラカード 小松園
 流し目でブラカード見る自家用車 南風郎
 ブラカード饅頭の匂も橋に付き 梅里
 ブラカードの鏡の後も橋につちて 広平
 アベックは見むきもしないブラカード 恒明
 首切り反対の後からサロンのブラカード 高志

阪東ベル十川柳会

飯尾寄与史選

思案するまをあたえぬコップ酒 いなか
 算盤を持って思案の首を折り 歩ッ歩
 銀の雨これで田をのみ山をのみ 多呂坊
 ニコヨンに歌を詠まざる雨が降り 三平
 雨漏りを天気になるとつい忘れ 寄与史
 挿木して嬉しく雨の中に立ち 寄与史

季節一品料理

江戸前にぎりずし

アベノ橋地下映画食通街

大萬

梅里の店

★大万川柳(第六十六回)を募る

兼題「酒豪」路郎先生選

締切・八月十五日(前夜五時以内)

発表・八月二十一日(金曜夜)

投稿は、阿倍野区松崎町三丁目 大万川柳会宛

柳界

展望

▼本社八月份
会は七日(火)
午後六時から
下寺町二丁目
市バス停前光
明寺で開催
▼大阪通信機
院馬ヶ辻川柳
会は七月二十
八日午後二時

から五階会議室で開催▼南区医師
会文化部香林川柳会(大阪市)は
七月十七日午後七時半から杏子居
で開催▼南海電鉄川柳会(大阪
市)は七月三十日午後六時半から
粉浜親和寮で開催▼既報本社第三
回川雑川柳まつりは七月八日午後
一時から光明寺に於て大盛會裡に
開催された。以上何れも路郎主幹
出席▼川雑婦人友の会(大阪市)
一周年記念句会が八月廿六日午後
一時から下寺町の光明寺で開催。
本社から麻生霞乃女史出席。各地
会員の来会を切望する▼川雑淀川
支部句会(大阪市)は八月三日午
後六時から武部香林居で開催。兼
題「虫干」「毒消し」「ネクタ
イ」の三題。▼大阪市交通局川柳
会七月句会は十八日午後五時から
局病院五階サロームで開催。
▼みをつくし川柳会(大阪市)は
七月十日午後六時から天王寺小学
校で開催▼富柳会(富田林市)は
七月七日午後一時から富田林市役
所日本間で開催▼333川柳会
(堺市)は、七月六日午後五時半
島野工業株式会社会議室で開催
▲川雑備前支部(岡山県)句会
は、七月七日午後六時から川雑川
柳まつり句会開催▼川雑岡山支部
の川雑川柳まつりは七月七日午後

一時から岡山日赤支部で開催▼川
雑備前支部六月例会は辛日午後六
時から久米雄居で開催▼三井造船
川柳部例会は六月二十三日午後
五時から三友クラブで開催▼川雑
大原支部(岡山県)では川雑川柳
まつり句会を七月十日夜、秋芳居
で開催した▼川雑鳥取支部では七
月九日川雑川柳まつり句会を開
した▼川雑倉敷支部では七月八日
川雑川柳まつり句会を開催▼川雑
米子支部では七月十五日に川雑川
柳まつり句会を節枝居で開催した
▼きしせん(岸和田市)八月句会
は十一日夕六時岸城神社で開催
▼後藤謙五郎氏の句集「雪の声」
刊行記念句会が八月二十六日午前
十時から黒石市御幸公園下、富士
見館で開催される▼紅川柳会(京
都市)では七月廿九日正午から寺
町三条上ル天性寺で平賀紅寿氏句
碑建立記念句会を開催▼川柳新書
刊行会(東京都板橋区上板橋町三
丁目六三九丸門哲哉氣付)から
第九集富田産詩朗集、第十集片柳
哲郎集、第十一集星野光一集が刊
行された。非売品。▼速水真珠洞
氏(福岡県)は六月十八日九州の
松島と云われる鳥原市へ旅行さ
れ、俳人碧梧桐の名付けた南風楼
に宿泊。同楼から旅信を寄せられ
た。▼中野愷徳氏(横浜市)が失
明されたこと、お気の毒に堪
えない。▼龜井花童子氏(北海
道)から川雑函館支部で七月八日
川雑川柳まつりを盛大に行うとの
うらしい消息を寄せられた▼枝野
登代秋氏(鳥取市・歌人)は鳥取
市で開かれた山陰川柳大会の感想
▼船木夢考氏(敦賀市)は、六月

二十一日名古屋川柳社の物故川柳
大会から帰致、二十二日金沢市に
出向かれ、久々に久留美氏と歓談
するとのこと▼星川陽石氏(玉野
市)は、恒例の淡川川柳大会を近
く開催するので準備に目下奔走中
の由▼瀧井貴州さん(婦人友の会
々員)母堂若柳吉艶重さんが六月
二十七日胃癌の為死去された。享
年四十六才、謹悼。

正 誤 (摩)

▼七月号一九ページ上段一五行目
「今日も来てる」は「今日も又来
てる」と訂正▼七月号一路集「麦
酒」「途中下車」の作家名に雪山
とあるは雷山の誤植▼七月号十九
頁下段二十一行目、越知義人は越
智義夫の誤りにつき訂正。

不朽洞會から

▼麻生路郎先生は、六月二十四日
午後一時から大毎会議室で開催の
関西短詩文学連盟に出席され理事
長に就任された▼牟田一哲博士
(大阪市)は六月二十一日札幌
市で開催の学会へ出席のため空路
出発の学会へ臨まれた▼阪田良坊博
士(下関市)は、六月二十五日浜
田市の義兄森脇忠一氏(弁護士、
選挙管理委員長)急逝のため会
葬、引つぎ、長門三隅町の友
人、脳出血で病倒を往診、帰途、
田舎の美しい清涼の朝を満喫、三
隅駅から路郎師に旅信を寄せられ
た。▼築山快夢起氏(ホノルル
市)は川雑川柳まつりについて、
ホノルルの新聞に記事を送られ弘
く意義ある川柳祭を盛んにするた
め柳人へ呼びかけられた▼小倉へ

路郎主幹の 趣味の川柳ゆかた 850円
自句自筆 60円
(社の振替を御利用下さい サービス部)

貴方の 8mm
アロ映寫機
動く写真の記念アルバム
貴方の学校・
会社の記録、
宣傳用に御家庭にも一
台御備え付け下さい
大阪 朝日電機製作所 東京

アロ映寫機をお求めなりたい方は川雑サービス部へお話し下されば格別
の御便宜をおはかりいたします。

麻生霞乃著・米田三男之介装幀
葎乃 福壽草
句集
本書は川柳の母・麻生霞乃女史の異色ある作品の金字
塔です。各方面から御好評をいただいで居ります。
大阪住吉区万代西五の二五
発行所 川柳雑誌社
〒595 住吉区万代西五の二五
電話(住吉) 六〇八一

定価二百五十円
送費三十円
菊半型・函入

暑中御伺

大阪通信病院
烏ヶ辻川柳会
五十名員

足立 春雄	仲谷ハナ子
井上 鴨水	西辻 竹青
池戸 桃村	橋本 峯春
尾崎 方正	橋本 幸男
小野木 凡平	樹本 露尼
北野 水楓	水谷 竹莊
木村 喜男	吉田 斜水
北川 春葉	森下 愛論
小沢 史葉	市場漫食子
	若林 章右

川雑淀支部

武部 香林	若本 多志	加納 山茶花	西森 花村	木村 水堂	坂田 東洋男	志水 清司	早川 清生	水野 清水茶	岡部 三郎	小林 文児	武部 若菜
-------	-------	--------	-------	-------	--------	-------	-------	--------	-------	-------	-------

とち氏(兵庫県)愛婿七月六日早朝自動車事故で負傷。病床に呻吟されている由。一日も早く御全快を祈る。▼高橋操子氏(岸和田市)は、川雑淀人友の会岸和田地区青葉の会を六月十七日岸城神社で開催懇親宴の盛況を喜び「酔わず気の盃先に酔いつぶれ」の句信を寄せられた。▼河村日満氏(鳥取市)は、米子市の三鴨笑氏を訪問柳談を交え大いに歓談された。なお日本海新聞の文芸欄に「川柳家の見た鳥取」を執筆された。▼前山北海氏(東京都)は、七月五日横浜港から乗船帰布された。出航に先立ち本社訪問、生憎、路郎先生が不在だったので残念がって居られた。▼西尾斐氏(大阪市)は八尾商工会議所議員改選の結果第一号議員に当選され役員改選で監事に就任された。▼松岡委源渡氏(善通寺市)は七月中旬に土佐へ旅行され偶然にも高知へ出張されていた渡辺藤童氏に会い欲談された由。▼三鴨笑氏(米子市)は本社川雑川柳まつりへ出席され、その夜の懇談会後、不朽洞へ一泊、翌九日の夜行で帰来された。▼尾藤之助氏(出雲市)から川雑出雲支部の川柳まつりは一畑電鉄の後援で立久恵殿で開催の予定であるとのこと。▼河村日満氏(鳥取市)から七月九日に川雑川柳まつりを開催乾杯をあげたこと、▼木口賀峯氏は八月上旬に新居の吹田市一三七へ移れるること、▼佐野ト占氏(八代市)は、六月六日下関市の藤田蘇人、石川侃流洞、中村九呂平の諸氏を訪問、歓談された由。▼大西迷窓氏(高知市)は、川雑川柳まつりに参加の催に奔走、昨年支部から三名の入選者を出したので、今年も又全員張切って居るとのうれしいたよりを寄せられた。▼菊田いさむ氏(吹田市)の令閨が七月八日川柳まつりの朝、急病のため中央病院に入院された。▼国弘半休氏

(広島市)は目下阪田良坊博士の想い出を執筆中の由。▼小西無鬼氏(兵庫県)は、神戸新聞の依頼により六月十三日の振丹版「振丹文芸」に笹山支部句稿を掲載同紙を飾られた。▼安原斜木氏 岡田青果氏は六月末限り一身上の都合により退会
(摩)

新会員紹介
七月
吉村凡骨(滋賀県)正
春葉氏推薦



後記

★どんなに暑くても編集室は山がどうの海がどうのと云ってヒマがありませぬ。皆さんの健康を祈りながら猛編集を続けて居ります。★本号は原稿が溢れたので次号へ割愛したものがかなり沢山あります。御読承願います。★本年は川柳まつりを二日繰上げて八日にしましたので十日の誕生日は家庭でゆつくりいたしました。私

スマートで
着心地のよい

O.S.K.
レディマード

大阪大坂商店

Printed in Japan

暑中御伺 川雑淀支部 誌集編局

木口賀峯
吹田市一三七ノ六

麻生路郎
麻生路乃
北川春葉
戸田古方
清水白柳子
丸尾潮花
真鍋一瓢
八木摩天郎
不二田一三夫

募集

課題吟集

枕元 (余句以也) 菊沢小松園選
パン (余句以也) 伊藤 茶仏選
賢夫人 (余句以也) 丸尾 潮花選
雑巾 (余句以也) 長野 井蛙選
(九月二十日締切)

毎号募集

近作柳樽 (俳句七首) 麻生路郎選
川柳塔(雑 詠) 北川春葉選
文章(評語・研究・感想其他)
(毎月二十日締切)

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募集。
▲「課題吟」は誰でも投句が出来る。
▲「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌

第十一号
第八号

比列5号 毎月一回一日発行
定価 五〇円
(送料四円)

昭和三十一年七月廿五日印刷
昭和三十一年八月一日発行
大阪市住吉区南内代町五丁目二五番地
行刊社 麻生 幸二 郎
大坂市住吉区南内代町五丁目二五番地
行刊社 麻生 幸二 郎

発行所 川柳雑誌社
電話 住吉 六〇八二
住吉区南内代町五丁目二五番地
電話 住吉 七五〇五

THE SENRYU ZASSHI

NO. 351

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

高血圧も忘れよう!



サーピナ錠

1日1~2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠!成分含量も多くてお得です

山之内

眼のないはなし



パパもママも ホーライ党

広東料理

蓬萊

大阪 なんば

大阪・名古屋・宇治山田を結ぶ 近鉄特急

座席指定ノンストップ 1日7往復 特急券は5日前から発売

大阪上本町	名古屋	宇治山田	所要時間
7.40 発	8.00 発	8.45 発	大阪—名古屋 2時間42分
8.40 "	9.00 "	9.45 "	大阪—宇治山田 1時間58分
11.40 "	12.00 "	12.45 "	名古屋—宇治山田 1時間38分
13.40 "	14.00 "	14.45 "	★ほかに便利な急行を大阪・名古屋 宇治山田間に60分ごと運転しております★
15.40 "	16.00 "	16.45 "	
17.40 "	18.00 "	18.45 "	
19.40 "	20.00 "	20.45 "	

特急料金

大阪上本町—名古屋	250円
"—宇治山田	200円
名古屋—宇治山田	200円

発売所

近鉄 大阪上本町・名古屋・中川・宇治山田各駅
近鉄観光案内所 大阪・名古屋・神戸・東京市内各案内所
日本交通公社 大阪・神戸・京都・奈良各案内所

近畿日本鉄道